

明治初期における信州上田のキリスト教の受容

——バイブル・ウーマン小島弘子とその所蔵図書を中心として——

宮 下 史 明
矢 内 義 顕

はじめに

第1章 信州上田におけるキリスト教の受容

- 1-1 小島弘子と小島大治郎家
- 1-2 信州上田教会の成立と小島弘子
- 1-3 小島弘子と共立女子神学校（横浜共立学園）
- 1-4 偕成伝道女学校と小島弘子——ピアソン女史との出会い
- 1-5 ミッション・スクールの創設

第2章 小島家所蔵図書の分析

- 2-1 小島弘子・小島包子所蔵文献目録
- 2-2 小島弘子・包子所有の聖書
- 2-3 小島弘子所有の聖書註解
- 2-4 その他の書物

おわりに

参考・引用文献

はじめに

2008年夏、長野県上田市の旧家である小島家より、大量のキリスト教関係の図書が見つかったとの連絡を受けた。早速、宮下と矢内が同家を訪ね、現物の

確認・調査を始めた。発見されたのは、主に明治20年代を中心とする聖書及び聖書の註解本40数点である。これらの図書の元の所有者は、同家の現当主の小島修一氏の4代前の先祖に当たる小島弘子と、その長男の嫁に当たる小島包子（かねこ）兩人であった。二人の死去後、これらの図書は、今日まで同家に大切に保管されて来たが、その存在がいつの間にか忘れられ、日の目を見ることは無かった。そのため保存状態は極めて良好である。現在これだけ大量のキリスト教の関係の図書を所蔵しているのは、同志社大学や青山大学などの大学が一部の教会しかない。個人でこれだけのキリスト教関係の図書を購入・使用し、保存されている例は、寡聞にして前例がない。

小島弘子の夫である小島左門太（小島大治郎家8代目）は、御鋳物師として幕末に大砲を鋳造するなど、鋳造技術史の面から以前から注目され、研究されてきた人物である。

元の所有者であった小島弘子は、地方の教会として最も古い上田教会の設立（明治9年）に参与し、また横浜の偕成伝道女学校（後の共立女子神学校）のピアソン女史から指導を受けたバイブル・ウーマン（女性伝道者）の先駆者の一人として、明治中期に活躍した人物である。この小島弘子については以前からキリスト教史研究者などの注目を受けてきた人物である。女性史研究家もろさわようこの『信濃のおんな』や清泉女学院短期大学の北原明文前教授による一連の優れた先駆的研究があるが、まだ充分に解明されているとは言い難い⁽¹⁾⁽²⁾。

他方、小島包子についてはこれまで全く触れられて来なかった。小島包子は、仙台の宮城女学校（現宮城学院）の高等女学部の第1回卒業生（明治26年卒）であり、在学中に押川方義牧師より受洗している。そして明治26年に卒業後、小島弘子の長男大治郎弘察の嫁として小島家に入り、一家の主婦として家業の発展に尽力し、弘子のように女性伝道者として表だって社会的活躍をしなかった。しかしその所蔵図書から判断すると、熱心に聖書研究をし、また陰で様々

な社会奉仕活動・社会貢献をしていた人物であったことが分かる。

小島家所蔵図書は、主に同志社のラーネッドによる明治20年代の聖書註解書を殆どすべて網羅し、大正時代に行われた聖書の統一翻訳作業以前の聖書研究の姿を伝える貴重なものである。この時代の註解書のレベルがどの程度のものであったか、その一端を明らかにして行きたい。

従来の上田教会並びに小島弘子の研究は、個々の人物の縦の研究が中心で、横の繋がりや分析を欠く嫌いがあった。しかし実際には、横浜海岸教会と上田教会は姉妹教会であり、また小島弘子と横浜バンドと呼ばれる日本人、それに横浜在住のヘボン、バラ、ブラウン、ミラー（ミロル）を中心とする外国人宣教師集団との間には、驚くほど密接な関係があったことが研究の途上明らかとなってきた。また弘子の家族のほぼ全員がキリスト教に入信し、上田においても稲垣信牧師（後に横浜海岸教会に移る）を中心とした“上田バンド”と呼んで良いキリスト教入信者グループが存在していたことも分かってきた。また押川方義牧師が横浜、新潟、上田、仙台を結び付ける重要な人物であったことも分かってきた。

本論文では小島弘子を中心とする明治初期の小島家の人々のキリスト教受容の姿と、当時キリスト教伝道の有力な方法として採られた女性伝道者の養成並びに女子教育のための女学校の設立にも焦点を当てて行きたい。

今年は明治維新より141年、小島弘子らの受洗、上田教会の創立から132年目に当る。明治初年に信州でキリスト教に入信し、当時の困難な状況の中で伝道活動を行なっていた人々の苦悩の一端が本論文で明らかになれば幸いである。また幕末から明治初年にかけて召命感を持って来日した多くの優れた外国人宣教師たち、女子教育に命をかけた外国人女性伝道士（教師）たちの活躍も併せて紹介したい。

論文の執筆分担は、「はじめに」と第一章は宮下史明、第二章並びに「おわりに」は矢内義顕が担当した。

第1章 信州上田におけるキリスト教の受容

1-1 小島弘子と小島大治郎家

小島弘子は、長野県上田市に隣接する埴科郡坂城（さかき）町の酒造家沓掛家（代々久蔵を襲名、屋号山根屋）の五女として、天保8（1837）年に生まれている。そして17才（1850年頃）の時、上田の小島左門太に嫁している。小島弘子について触れる前に、まずこの小島家がどのような家であったか述べておきたい⁽³⁾。

小島家は天正12（1584）年の真田氏上田築城の際、当時の鋳物業の先進地の一つであった野州（栃木県）佐野天命から招かれた鋳物師であった。最初の頃（1600年代）は佐野と上田の間を往き来して営業していた時期もあったようだ。しかしその後人別が成り、上田における初代小島大治郎藤原弘貞（延享元・1744年没）以来、代々小島大治郎を襲名し、上田常田村に居住していた勅許御鋳物師であった。屋号は「鍋大」と言い、信州の市場を松本、諏訪、善光寺などに居住していた他の鋳物師達と分け合っていた盛大な鋳物師であった。



（小島弘子）

左門太は小島大治郎家の8代目に当たる。家業の傍ら近くの毘沙門堂の名僧活門禅師に師事していた。ここで同じく教えを受けるために松代から通っていた佐久間象山とも知り合っている。左門太は故あって大治郎を襲名しなかった。それは幕末に佐久間象山や上田藩の依頼を受け、文久3（1863）年に最新鋭のアメリカ式ライフルカノン砲5門などを鋳造しているからである。この大砲は水戸浪士の追い討ち、鳥

羽・伏見の戦などに使用されている。砲弾は伏見の里で鑄造したという。この大砲の挽き型は現在小島家に保存されているが、江川太郎左衛門家に伝わるアメリカ製大砲の図面の一枚と同一寸法のものである⁽⁴⁾。

また小島家には『鐵煩鑄鑑図』というオランダの鑄砲技術書が残されている。このようなことから、左門太には日本とアメリカやヨーロッパ諸国との技術の差が十分に分かっていたはずである。元治元（1864）年に佐久間象山が暗殺された後、左門太は身辺整理をして、京都から上田に帰ったと伝えられている。慶応2（1866）年には当時まだ全国の御鑄物師を支配していた京都の真継家より、歴代の当主と同様に、鑄物師職許可状を受けている。また同年には内裏に灯籠を献上している。上田に戻ってからは常田村の戸長を務めるなどしたが、他の徳川方各藩の士族と同じように、左門太には新政府などの中でその活躍の場が与えられなかったようである。そして明治8（1875）年に45才で亡くなっている。明治4（1871）年には左門太の父大治郎弘近もすでに亡くなっている。

明治時代に入ると、従来の株仲間も廃止され、御鑄物師の特権的地位は失われた。そして製品も従来の鍋・釜などの日用品や梵鐘、仏像などから、機械鑄物、工業用鑄物に変わってきた。また鑄物の原材料も従来の和鉄（たたら銑）から洋銑（高炉銑）に代わり、燃料も木炭からコークス、鑄型も焼型から生型へ、送風も人力による踏鞴からモーターへと大きく変化した。また一般的な不況の時期でもあり、これらの変化に対応できなかった全国の鑄物師の多くは転廃業している。小島家にとっても左門太の死は正に危機であった。この時期に左門太の長男彦太郎〔安政6（1859）年生まれ〕はまだ幼く、明治6（1873）年に成明小学校（同年創立）に入学した。そして14才で武州児玉町八幡山金屋村の鑄物師倉林家に修行に行った。そして鑄物の修行の傍ら名僧から漢籍を学んだという。左門太の死後、彦太郎は急遽帰郷し、17才で家業を継ぎ、大治郎弘察を襲名している。弘察の作品としては、明治24（1891）年の国宝長野善光寺本殿の柱の根巻きや明治25（1892）年の諏訪上社、下社春宮の大鳥居などが

現存している。機械鋳物、工業用鋳物の他、青銅鋳物も注文に応じて積極的にやっていたことが分かる。残念なことに梵鐘などの金属製品は、第二次世界大戦時の金属回収令によって、ほとんど全て失われてしまっているのです、先祖代々からの活動の跡は、金石文資料以外全く分からなくなってしまった⁽⁵⁾。

この時期の小島弘子の動静は分からない。すでに二人の娘と二人の息子に恵まれている。懸命に家業を守ったと思われる。時には原材料の故鉄を買うことが大変なこともあったという。鋳物製品は耐久性のあるものなので、鋳物業は景気変動を受けやすい業種である。

鋳物業は、2階建て以上の高さのある大きな工場の建屋が必要であり、その中に留甌（溶解炉）、踏鞴（送風装置）、鋳型場、故鉄・炭置場などがあった。また製品置場、木型蔵なども必要であった。つまりかなりの資本と技術を必要とした当時の重工業であった。住み込みの職人やたたきの人足も居り、鋳物師の妻はそれらの人々の面倒をみることも仕事であった。その点、酒造家の家で育った弘子にとって、杜氏や蔵人と呼ばれる住み込み職人のいる生活を見慣れていたもので、鋳物師の家の切り盛りもこなしていけたと思われる。士族の家から嫁にきた大治郎の先妻である勝子や後妻の包子にとっては全く別世界であったことだろう。

鋳物師の仕事場に女人は立ち入り禁止であった。それは鋳物師たちが祀る金山媛命が女性であるため、女性の立ち入りを嫌うからともこれまで説明されてきた。しかし実際には、高温で粉塵が立ちこめ、騒音も酷く、また重量物を扱う職場は、男性にも危険で大変な場所であったからである。鋳物師の妻は気丈で、使用人達にも気配りしていかなければならなかった。

この当時の上田地方の日常用鍋釜の販売は寺院の縁日と結びついていた。上田の東にある信濃国国分寺では1月8日に、八日堂のお祭りと呼ばれる縁日があり、近在から多くの参拝者があった。人々は古い鍋釜を持参して、鋳物師の居住していた上田常田村の小島家など3軒の鋳物屋で、それを下取りして貰っ

て、新しい鍋釜を購入した。この地方ではこれが習慣となって、新しい鍋釜は正月八日しか下ろさないと変わった。このような状況は江戸時代から昭和の初めまで続いたという。年間販売の大部分がこの日に売れるので、小島家では夜明けから家人総出で店を手伝ったという⁽⁶⁾。

吹き（鋳物の溶解）の日は、夜の明けない内から作業を始め、特に送風のための踏鞴踏みは長時間の重労働であった。そして鋳型に湯（熔けた金属）を注入し、明るい内に作業を終了し、後片付けをして風呂に入って一日の作業は終了する。この日は高温と騒音、それに大変な粉塵、ガスが飛び、工場だけでなく家人のいる住宅、隣近所も大変であった。夜に入っの“火の用心”のための工場の見回りは家人の仕事だった。鋳物は作業終了後も長時間火の気が残るのである。火気を扱う鋳物師の家にとって、火事を出すことは絶対に許されないことであった。鋳物業は今で言う“3K”の公害型の典型的職業であった。弘子、勝子、包子などの歴代の小島家の嫁たちは、当然のようにこれらの役目をこなしていた。

当初、小島家では弘子一人が受洗し、伝道活動に従事していたと思われていた。しかしその後研究を進めていくと、弘子一人だけでなく、弘子の二人の娘、その二人の配偶者、そして長男の嫁、内孫、外孫も受洗しており、小島家一家を挙げてキリスト教に入信したことが分かってきた。そこで弘子の宗教活動の研究には、やや煩雑になるが、まず小島家の人間関係を分析しておく必要がある⁽⁷⁾。

小島左門太・弘子家 家系図

小島左門太弘遠 {天保1（1830）年～明治8（1875）年}

小島弘子 {天保8（1837.8.12）年～明治37（1904）年} 左門太の妻 坂城の

沓掛久蔵 五女

（長女）さだ {安政3（1856.1.12）年～明治35（1902）年}

(次女) なを {安政4 (1857.5.25) 年～昭和6 (1931) 年}

(長男) 彦太郎 (大治郎) 弘察 {安政6 (1859) 年～昭和4 (1929) 年}

(次男) 勝次郎 (別家小島国三郎家を相続) {文久3 (1863) 年～明治12 (1880) 年8月16日没} 享年16歳9月 (横浜根岸共同墓地に葬る)

* (婿) 小島友太郎 (小島家分家) {安政3 (1856) 年12月27日～?} 長女
“さだ”と結婚、友太郎の母は小島 (杳掛) みや子 (弘子の双子の姉)
判事・弁護士 後に松本へ移住 日野忍の親

* (婿) 岡部太郎 (牧師) (同志社神学校卒) 長野県春日村出身 次女“なを”
と結婚

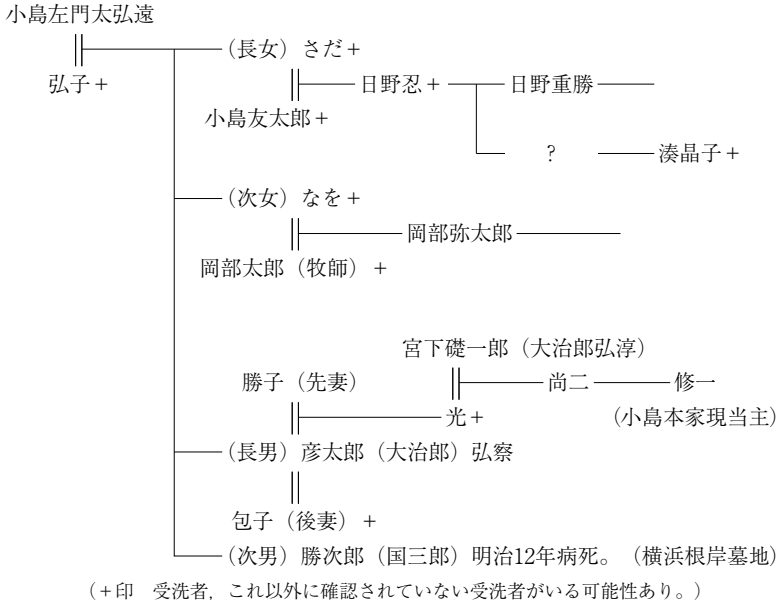
* 小島勝 (かつ) 子 彦太郎弘察の先妻 (上田藩士 平手半佐衛門娘) {元
治1 (1864) 年～明治27 (1894) 年} 30才で没。 光 (みつ) の母

* 小島包 (かね) 子 {明治6 (1873) 年～大正13 (1924) 年} 彦太郎弘察
の後妻 {明治27 (1894) 年結婚} (前橋藩士 関屋融の娘、のち前橋藩
士武田喜久双の養女となる)

小島光 (みつ) {明治21 (1888) 年～昭和52 (1977) 年} 大治郎弘察と勝子
の子 明治42 (1909) 年上田市諏訪形の宮下礎一郎 (大治郎弘淳) を養
子として結婚。小島家の家督を相続。

弘子の長女“さだ”は安政3 (1856) 年に生まれ、46才で亡くなっている。
明治9 (1876) 年に宣教師バラ (J. H. Ballagh) から受洗している。その夫の
小島友太郎 (安政3年生まれ) は小島家の分家筋で、母親は弘子の双子の姉小
島みや子 (旧姓杳掛) である。友太郎は弘子と同じ明治9年8月13日に、横浜
海岸教会の宣教師ミロル (ミラー E. R. Miller) より上田で受洗している。
ミロル夫人は、フェリス女学園の創始者ミス・キダーである。当日集団で16名
が受洗している。ミロル夫妻はこのために休暇静養中の軽井沢から上田を訪れ
ている。これは上田における初穂であった。そして友太郎は上田教会の執事、

『小島家家系図』



長老、教会書記などとして活躍した。職業は判事、弁護士であったようだが、後に長野から松本に転じ、上田教会の活動から離れたようだ⁽⁸⁾。

弘子の次女“なを”は安政4年に生まれ、74才で亡くなっている。上田教会創立式に当たって、明治9年10月8日に“さだ”と共に、新潟から横浜に戻る途中のバラから上田で受洗している。その日は19名が集団で受洗している。そしてその後横浜の共立女学校で学び、信州佐久春日村の牧師岡部太郎（同志社神学校卒）と結婚している。長女さだ、次女なをの二人は他家に嫁しているので、小島本家に詳しい経歴や資料は残されていない。

後述するように、この2回に亘る集団受洗者と、先に受洗していた稲垣信、坂巻淳一郎を加えて、37名で上田基督公会が創立されている。このように上田基督公会（上田教会）の成立には、最初から横浜海岸教会が深く絡んでおり、

また上田における中心人物として小島弘子を軸とする小島家の人々が深く絡んでいたのである。日本で最も古い地方教会の一つである上田教会は、このようにその成立時に横浜海岸教会の姉妹教会としてスタートしたという特異な事例である。

海老沢有道の研究によれば、上田教会受洗者の中で、バラから受洗した者36名（計6回）、ミロルから28名（2回）、上田教会牧師真木重遠から34名（9回）、石原保太郎から10名（3回）となっている。このように上田教会は第二東京（北部）中会に所属していたにもかかわらず、授洗者の殆どが第一東京中会に所属していた宣教師・牧師であったのは、その創立以来の伝統に負うものであろう⁽⁹⁾。

長男の弘察（1859～1931）は、その後家業を発展させ、勝子と結婚した。勝子は上田藩士（祐筆）平手半佐衛門の二女である。勝子は長女光（みつ）を生んだ後、体調が優れず明治27（1894）年に30才の若さで亡くなっている。勝子については賢夫人であったと伝えられているが、他に記録が残されていない。その後、平手家も血筋が絶えたという⁽¹⁰⁾。

勝子亡き後、弘察は同年暮に包子と結婚している。包子は前橋藩士関屋融の長女として生まれ、幼くして叔父の同藩藩士の武田喜久双の養女となった。そして明治19年より仙台の宮城女学校に7年間学び、ミス・プルーボ校長の指導を受け、明治26（1894）年に高等女学部第1回卒業生4人の首席として卒業している。この卒業式の模様は、『天にみ栄え 宮城学院の百年』に詳しく述べられている。在学中は武田姓を用い、また蔵書には旧姓の関屋（Sekiya）を使用していたことも多い。そして在学中に押川方義師より受洗している。卒業後武田家にしばらく戻ったが、伯父の上田裁判所所長関屋生三の媒酌で明治27（1895）年に弘察と結婚し、小島家の人となった。包子と共に関屋ゆきも同年宮城女学校を卒業した4人の内の1人である。関屋ゆき（明治12年12月21日に上田で受洗）は包子の生家関屋家の人（従姉妹？）で、その後、武藤健牧師と

結婚している⁽¹¹⁾。

弘察と包子の結婚は全く不思議な縁である。包子の実父も養父も上田裁判所の判事であったようであるが、二人とも教会の仕事を手伝っている。その際に弘子と面識が出来たのだろう。また宮城女学校は押川方義の学校でもあり、上田出身の稲垣ぎん（稲垣信の妹）も横浜の共立女学校で教えた後、宮城女学校の教師になった。共に弘子と面識のあった人物たちである。

不思議な縁で小島家の人となった包子は、姑弘子（当時57才）の世話と弘察と先妻勝子との間の子光（みつ）（当時7才）の養育、それに家業の発展に全力を尽くした。その結果、弘察は事業を先祖伝来の鋳物業から拡大し、明治末期から大正期にかけて、田沢炭鉱、上田瓦斯、上田繭糸、丸子鉄道、上田温泉軌道などの会社を設立し、その社長に就任している。当時信州を代表する実業家の一人であった。弘察はこれら事業の傍ら多くの社会事業、育英事業もおこなっている。弘察自身は小島家の長男として、仏教徒として菩提寺の先祖の墓を守り、高野山に先祖の供養塔を建立している。また鋳物業のしきたりとして、ふいご祭りをするなど、伝来の神を祀ることも必要だったのである。しかし弘察の出版した『小島包子追悼集』を読むと、弘察自身もキリスト教を深く理解していたことが良く分かる。今日の小島家があるのは包子に負うところが大きい。

プロテスタント的な徳目が、自律、自助、勤勉、正直、質素、節約などすれば、これらの生き方は、当時の武家や伝統ある老舗の商家・企業家、旧家、庄屋・富農などにも備わっていたものである。日本的伝統と何ら矛盾するものではなく、それらに類似したものがわが国にも存在していたと言えよう。そのような点で、弘察はプロテスタントの精神を充分会得していた企業家であったといえよう。それは母弘子と妻包子の影響もあったであろう。弘察の社会事業の後ろには常に包子がいた。包子は幼稚園やボーイスカウトの支援、育英事業、愛国婦人会活動などを行なっている。包子の葬儀に際して、教育家でもあり愛

国婦人会会長でもあった下田歌子から弔電が届いている⁽¹²⁾。

次男の勝次郎は文久3（1863）年に生まれ、別家小島国三郎家を相続した。そして貿易商になるため横浜に出て、太田町6丁目に居住していた叔父の沓掛麟太家（弘子の親族）で修行していた。明治12年8月に当時流行していたコレラに罹り、16才9ヵ月で早世し、相沢墓地（現横浜根岸共同墓地）に埋葬された。この墓地は横浜共立学園に近い場所にあり、勝次郎の死は弘子が偕成伝道女学校に入学した時期、明治15（1882）年秋の数年前であった。おそらくこの勝次郎（国三郎）の死が、弘子がピアソン師の指導を受け、バイブル・ウーマンになっていくきっかけの一つであったのだろう。

弘子の孫光（みつ）は明治21（1888）年に生まれている。その名前の由来は、光誕生の日、弘子は聖書を開け、たまたま目に飛び込んできた文字が光に関する記述であった。そこで「エフェソ書」5章8－9節から光と命名したという。光は上田女学校を卒業後、上京して弘子と親交のあった矢島楫子の女子学院に学んでいる。そして明治44（1900）年に上田諏訪形の宮下礎一郎（大治郎弘淳）を養子として迎え、小島家を相続している。光も早くから受洗を希望していたが、信仰は一生のことであるから慎重にという弘子の忠告を受けている。そして後に受洗している。しかし光は小島家の中心として、菩提寺（上田宗畔寺）や高野山蓮華定院との関係は変わらず維持し、また神棚も祀っている。長い伝統のある家系の中で、キリスト教の信仰はあくまでも個人一人のものであるという姿勢を崩さなかった。同家の光の子孫のなかにその後受洗した者もいるが、それはあくまでも個人の問題であるとの考えが貫かれてきた。しかしキリスト教的生き方は今日まで同家に脈々と流れていると言えよう。光は昭和52（1977）年に89才で永眠している。これで弘子を直接知っている人物はいなくなった。光は3女5男の子供に恵まれている。家系図では小島本家の直系の当主の流れのみを記載するに留めた⁽¹³⁾。

1-2 信州上田教会の成立と小島弘子

先述したように、小島弘子とその家族は明治9（1876）年に受洗している。上田における初穂であった。そしてこれらの人々を中心に、同年10月に上田基督公会（上田教会）が創立されている。それは明治6年にキリシタン禁令の高札が撤去されてから間もない時期であった。

横浜公会と初期の時、姉妹関係にあった教会は、東京公会（新栄橋教会、新栄教会）と共に、上田基督公会であった。日本基督教会横浜海岸教会の井上平三郎牧師は『濱のともし火』の中で、次のように記述している⁽¹⁴⁾。

「1876（明治九）年3月13日、坂巻淳一郎が受洗。8月13日、日下部省吾、村瀬直養、木村寛司、糸我莊、村瀬宗之、土屋孝吉、新井清兵衛、新井儀三郎、小島友太郎、笈川久太、松村きん、沓掛むつ、沓掛ひろ、橋本屋寿、稲垣ぎん、稲垣あい（小児）、成人15名、小児1名がミロルから受洗した。真木重遠は多分通訳で同行した。同年10月8日、バラは弘前、新潟を経て上田に立ち寄り、19名に授洗して信徒32名で上田公会を結成した。稲垣信を長老に、日下部省吾を執事に選んだ。受洗者の名は小林滝太郎、宮下謹吾、町田八郎、田中救時、田中四郎、笈川綏太郎、山寺半右衛門、犬飼新、小島さだ、小島くに、小島なを、掛川やすが、世良田さく、木村まさ、木村なか、尾山かち（稲垣信母祖）、早川やす、小島たけ、隠岐つね、である。今これらの名を書くのは、歴史的意味として、キリスト教禁制の空気の中で、勇気を持って先進的な意識を持って信仰にとびこんだ人の名を記憶したいからである。それと共に思うことは、これらの人々の孫や曾孫で、上田や各地に生きている人々がおろう。それらの人々は、今はキリスト教を離れて日本の旧来の宗教に帰り、あるいは無信仰になった人々もおろう。その方々がもし、上田基督公会初期の人々のなかに勇気ある血縁の人々を見出すならば、その勇気の源泉となったキリスト教信仰に関心を持って欲しいものである。」

（注：真木重遠は牧師）

また井上平三郎は続いて次のように記載している。

「76年（明治9年）8月13日、ミロルから受洗した16名の中に沓掛ひろがいます。彼女は小島左門太に嫁し、すでに寡婦となっていた。39歳で受洗後、亡き子の霊を慰めるためか、共立女学校伝道部に学んで各地に婦人伝道者として活躍した。のち長男夫妻の家を守るために上田に帰り、矢島楯子と親しく信濃キリスト教婦人会の創立に努力した。その家族にはキリスト者となった者が何人もいます。」

このように当時キリスト教徒になるには大変な勇気がある状況であった。取り分け地方では一層大変だったことだろう。西南の役（明治10年）直前の時期であった。文中の沓掛ひろは小島弘子の旧姓であり、他に小島友太郎、小島さだ、小島なを、の4人の小島家の人々の名が記載されている。

上田教会創立については幾つかの先駆的研究によって解明されてきた。しかしその設立の中心人物の一人であった小島弘子が、いつどのようにキリスト教に出会ったのか、また何故、どのようにしてキリスト教徒になったのかは、まだ十分に解明されていない。そこでまず上田地方におけるキリスト教の受容の歴史に触れて見たい。

上田地方でまずキリスト教に触れた重要人物は、上田出身者で最初の受洗者となった鈴木親長（明治7年新栄教会で息子の銃太郎と受洗、長女のカネは共立女学校で学ぶ）、稲垣信（明治9年1月30日バラより受洗）などであった。鈴木親長、稲垣信はともに旧上田藩士であった。これ以外に旧上田藩主の松平忠禮一族も明治5年からアメリカに留学している。しかしこれらの旧藩主の一族は上田教会の成立などに貢献した訳ではない。鈴木親長は此の後、長男、長女を伴って、明治16年から北海道十勝の開拓に従事した。世良田亮（海軍中将）も上田に生れ、明治7年にタムソンから受洗している。このあたりの状況については、海老沢有道や北原明文、井上平三郎、塩入隆などの論考に詳しい⁽¹⁵⁾。

この当時、意欲的な若者の間で従来の蘭学・オランダ語の学習から英語を学ばないという風潮があった。稲垣信も始めは英語学習が目的であった。英語を

習得するには横浜に行くことが最善の道であった。また宣教師を日本に派遣したミッション側でも、キリスト教解禁まで英語塾を開くなどして時の来るのをじっと待っていたのである。「米国改革派（ダッチ）教会）」や「米国長老教会」などは、「日米修好通商条約」発効後間もなく宣教師を派遣し、日本伝道に備えていた。しかし後述する「宮城学院」の母体となった「合衆国改革派（ジャーマン）教会」は、遥かに遅れて明治12（1879）年になって日本に宣教師を派遣している。アメリカのプロテスタント系のミッションが中心であったことが、この時代の著しい特徴であった。

鈴木親長は明治8年8月8日に郷里上田で伝道を企てた。しかし「当時上田地方ニ於テ教会ニ入りシモノ一人モナカリシ、上田ニ於テ稲垣信等ト謀リ僅カニ安息日ノ集リヲ始ム」というような状態であった。鈴木はこの前年に上田で聖書販売をしようとしたが、妨害されたとも伝えられている。此の頃、松村宅で、稲垣、日下部、犬飼、村瀬、松村、岩崎などの人々が集まったという。そして75年（明治8年）10月19日に稲垣信などによって上田禁酒会が設立された。この禁酒会の結成を押川方義もたまたま見ており、上田には小バンドと呼ばれる人々の集まりがあったことを報告している。ブラウンの明治9年1月27日に「米国改革派教会」外国伝道局総主事のフェリスに送った手紙の中に、「押川は横浜基督公会から依頼されて、応援に出かける結果となったのです。彼は有望な青年であり、聖霊に満たされています。新潟に行く途中、本州の裏側を形づくる山脈の反対側にある信州に、一晩とどまりました。そして、そこに、十誡を憲法として禁酒会を組織し、安息日を厳守し、聖書の一部を読むという、小人数のバンドを、彼は見たのです。このバンドは、押川を三日間引きとめ、彼の口から福音を学びたいと申し出たのです。そこで、このバンドの一員で、聖霊に潔められた者が横浜に来て、信州に、福音を説く人を得たいと申しでたのです。その結果、横浜基督公会のもう一人の長老、篠崎（桂之助）がその人と一緒に信州に行く決心をしました。そのため、わたしは神学塾の一番すぐれた

生徒二人を失ったのですが、しかし、こういう召命への懇請を、断ることは出来ません。』⁽¹⁶⁾

これは正に上田教会成立直前の状況で、上田において、当時上田バンドと呼ばれる良いグループが形成されつつあったことが分かる。

このようにブラウンはその弟子の横浜基督公会のもう一人の長老篠崎桂之助を信州に派遣している。この上田禁酒会が上田基督公会を結成する母体となった。上田禁酒会の趣旨は次の通りであった。「本会の趣旨は、邪神を棄て、真神を拝し、酒を禁じ、聖日を守り、互いに仁愛慈善の行為を励まし、社会の弊風を一洗せんとするにあり」。

稲垣信は『風変わりの禁酒教会』の中で、小島弘子と思われる人物について、次のように記述している。「ほかに女の大酒家もあったが、彼女も悔改めて基督を信ずるに至ったのである。最初、彼女が聖書研究会で、箴言の講義を聴いたときには、それに反動し、却って大酒を飲むに至ったのであるが、後日、その非を悟って断然禁酒をなし、それと同時に基督を信じ、のちに横浜の共立神学校を卒業して聖書婦人になったのである。」この時期に上田から共立神学校に行った人物は小島弘子以外いない。この年（明治8年1月3日）に弘子の夫左門太が45才で亡くなっている。杜氏や鋳物師は男の世界である。まだ30代後半の弘子は、17才で父の跡を継いだ幼い長男を支えて家業の鋳物業を継続し、また4人の子供の世話もしなければならぬ最も大変な時期であった。大変なプレッシャーがかかったものと思われる。弘子の生家は先述したように坂城の酒造家である⁽¹⁷⁾。

上田教会は士族の教会ともいわれ、これらの人々は上田から転出する者も多かった。この最初の受洗者たちがどのような職業の家の人々であったのか、その氏名から判断することは困難で、まだ資料的に確認できていない。この時代、現在のようなサラリーマン階層はいなかった。そこで地元の商工業者、農民層、役人をも巻き込んでいないと、その後の教会の発展は難しい。士農工商の社会

が崩れ、四民平等の社会になると、その打撃は旧士族層でもっとも大きかった。上田においても、かつての知識階層であった旧士族から裁判官になったような新しい中産（知識）階層の人たちが、聖書研究をしたり、子女をミッション・スクールに入れたりしている。この点については後に触れたい。

上田公会は日本基督公会の一つとして、最初は無牧としてスタートしており、稲垣信が長老であった。明治10年になると日本基督一致教会下に置かれ、真木重遠が牧師として赴任して来た。そして長老に日下部省吾、犬飼新、坂巻淳一郎の3名、執事に宮下謹吾、小島友太郎2名の体制であった。真木重遠はその後明治13年まで牧師として上田に留まり、明治14年から21年まで無牧の時代が長く続いた。その間、明治12年から16年にかけて、日下部省吾、小島友太郎2名の長老体制で教会活動を維持してきた。小島友太郎は先述したように、小島弘子の長女さだの娘婿であり、弘子と同時に受洗した人物である。しかし小島友太郎は、明治17年以降上田教会役員の名簿から消えている。おそらく長野、松本に転勤して行ったのであろう。日下部省吾は明治25年まで長く長老の職にあった。

小島弘子の名前が出てくるのは明治24年から執事として教会資料に記載されている。明治29年を除いて明治33年まで執事を務めている。これは弘子が明治21年に横浜のピアソン女史の許から上田に戻ってきた時期から、伝道生活を盛んに行ない、晩年となった時期とも一致する⁽¹⁸⁾。

上田教会は士族による教会の色彩が濃く、なかなか他の商工業者や富裕の農民層を会員に取り込めなかった。また中心メンバーが各地に散り、そのため無牧であった期間も長く会員の増加は遅かった。そこに上田教会の悲劇（苦悩）があった。上田における小バンドが上田バンドとして発展できなかったのは、この会員の移動が多かったためであろう。そこでいきおい創立時の会員の親族などが中心となっていた。また財政的にもなかなか自立が図れず、明治21（1888）年になってやっと自給教会となった。上田教会の場合と同じように、

多くの日本の教会はその設立時、横浜海岸教会や海外の宣教師派遣団体などの援助を受けている⁽¹⁹⁾。

ここで上田教会の戦略的位置について言及しておきたい。上田は日本列島のほぼ中央にあり、乾燥した気候で、養蚕・製糸業が盛んな地域であった。絹製品はお茶と共に当時の日本の重要な輸出品であった。そのため“絹の道”として、上田は碓氷峠を越えて横浜と結びついていた。上田は決して一地方都市（城下町）という訳でなく、東信地方の拠点都市であって、信州布教の拠点でもあった。とりわけ当時の日本のキリスト教布教活動の主導的役割を果たしていた横浜海岸教会にとって、開港5都市の中で最も布教が困難な地域であった新潟を攻略するために、横浜から新潟に行くルート of のほぼ中間に位置する上田（教会）は必要不可欠の拠点であった。殊に明治23年に信越線が開通するとこのルートが新潟に行くメインルートとなった。そのため、ミロルやバラを始め押川方義（明治5年3月10日バラより受洗）などが度々上田を訪れている。また稲垣信が上田教会から移って明治10年に横浜海岸教会の牧師となっていたことも、両者を緊密に結びつける絆となっている。北原明文によれば、上田教会にはリフォームド・ミッションのミス・ブロッコ、ミス・ディヨー、ミス・ワイコフなどの婦人宣教師（フェリス女学院教師）が滞在し、信州宣教の活動拠点となっていた時期もあったという。

ピアソン女史も度々上田を訪れ、小島弘子らとここから小諸、佐久、飯田などの長野県内の伝道をおこなっている。佐久地方には素封家はいても中心となる士族が居らず、岩村田講義所などは出来ても、明治32年の佐久教会の成立までなかなか時間が掛かった。松本は上田から行き難い地域なので、横浜海岸教会ではなくメソジストによる布教が行なわれた地域であった。飯田の伝道は、上田裁判所判事だった武田某（おそらく包子の養父）がここに転勤し、聖書研究会を開き、牧師を上田教会から招いている。松代もまた重要な伝道対象の地域であった。

ここで新潟伝道の状況を述べておきたい。この地のキリスト教伝道の始まりは、明治8（1875）年に宣教医師 S. E. パームを派遣したエディンバラ医療伝道会の活動に始まる。医療伝道は伝道の一つの有効な手段だった。新潟は5つの開港地のうち唯一プロテスタントの宣教師がいない場所であった。新潟は仏教王国なのでキリスト教の布教は困難を極めた。そこでパームは横浜のブラウンに書簡を送り、誰か協力者を新潟に派遣してくれるよう依頼した。それに応えたのが横浜基督公会の長老押川方義であった。誰も手を挙げないその時、押川が「私が行きます」と名乗りでた場所が山手212番地、現在の横浜共立学園のある場所だったという。押川は明治8（1875）年に、信州ルートを通して、上田にも立ち寄り、13日をかけて新潟に到着している。

押川の働きもあって新潟での布教は少しづつ成果を挙げて来た。その中で押川と共に、後の仙台の東北学院や宮城学園の創立に貢献した吉田亀太郎がパーム塾生となってきた。明治13（1880）年に新潟に大火が発生し、診療所など大きな被害を受けた。これを一つの転機として、押川、吉田は東北地方伝道を試みた。それを許したのは、パームの大きな度量であった。

明治13年9月6日に、押川一行は新潟を家族と発ち、15日には上田を出発して東京に出て、さらに船で石巻、仙台に向かっている。一行のうち押川の身重の妻は人力車、他は徒歩という大変な旅であった。そして伝道の結果、翌明治14年に仙台教会が創立されている。このように押川らの活動の中心は新潟から東北地方に移り、また伝道活動以外に学校の創設（現東北学院、現宮城学園）という新しい方向に発展している。また晩年には押川は代議士として活躍した⁽²⁰⁾。

これまで小島弘子の授洗はバラによって行なわれ、その理由は次男の死がきっかけであったという説が、もろさわようこの『信濃のおんな』や後に引用する佐久基督教青年会紙『利剣』の竹内虎成牧師の記事「小島弘子小伝」に述べられてきた。受洗記録はキリスト教徒にとってもっとも大事な記録である。

もろさわようこは弘子の孫の光に取材したと思われる。他方『利剣』は明治36～37年、直接晩年の弘子をその自宅に見舞って記述している。本人の記憶違いか取材者の聞き違いがあったのかも知れない。しかし小島弘子は『上田教会歴史資料』にあるように、明治9年8月13日に横浜海岸教会のミロル宣教師によって上田で受洗している。また『信濃の女』では、弘子が明治15年に横浜海岸教会において、バラから受洗したとなっているが、この点について、横浜海岸教会に確認したところ、バラによる弘子の受洗記録はないとのことであった。弘子の次男の死亡は明治12年であるので、この時点では次男はまだ生存していた。受洗の理由の一つは、受洗の前年の明治8年1月3日に弘子の夫の左門太が45才で亡くなっていることが考えられる。非常に大事なことなので、この際訂正しておきたい。

弘子の入信には押川方義らが度々上田に来たことや、稲垣信の禁酒会活動などが影響を与えていると思われる。また横浜に弘子が行ったのは、もし次男の勝次郎を長男と同じ14才で貿易商の叔父の許に修行に出したとすれば、明治10年頃となる。あるいはそれ以前に弘子は横浜に行っていたかも知れない。その際に横浜海岸教会あたりでバラ、ミロルなどに会っていたと思われる。明治9年以前の数年間が弘子入信のキイポイントである。横浜に居住していた外国人宣教師については次節で触れたい。

生前の弘子については、もろさわようこの『信濃のおんな』の小島弘子の部分に、そのエピソードが紹介されている。左門太・弘子夫婦の人柄を知る良い資料であるが、ここに引用すると長くなってしまうので引用するのは避けた。この著作は現在も市販されているので、直接原本に当たって頂きたい。ここではなかなか入手できない明治38年の佐久基督教青年会紙『利剣』の記事を紹介したい。弘子を知る得がたい資料である。著者の竹内虎成は上田教会の牧師である⁽²¹⁾。

「小島弘子小伝」 竹内虎成 （『利剣』明治38年8月5日号，9月2日号）

（1）高知を去って上田に来らんとするに当たり，旧友併に教友の送り来るものと松鼻に別かる。松鼻とは高知湾の水を市内に導きて，舟運を便ぜし運河様のもの，浦戸港に客待ちの汽船に，舳の発する所となる。中に津久井新三郎氏あり。余に語って曰く，君上田に行かば鋳物屋の老婦人を見ん，この人は上田教会にて有力者の一人なりと。既に汽船に入り大阪に着し，京都に一夜を明かし，春雨粛々の中に東京来りて，更に碓氷の峻坂を経て鉄車上田に来る迄，余は同氏の語を忘れ居たりき。上田に着後殆ど旬日にして，日下部謙太郎氏に案内され，余は当年の覇気を収めて，病を養いつつある彼女を鷹匠町に訪ね，初めて病床に相見るを得たりき。

彼女は天保八（1837）年に生まれ，加うるに幾多の苦戦を，波瀾多き人生の海に為したる事とて，面貌大いに変りたるや否や知らねども，小造りにて背高からず一見可愛らしき老婆に見ゆれども，彼女と相語る少時にして亦何処となく言葉の中に，食えぬ節あるを覚ゆ。小さき眼細長き顔，半白の髪を惜気もなくザッ切りにしたる姿にて，飾り気なく己れが伝道界——而も日本伝道界上古時代に立ちて，女だてらに日本の各地に基督を説きたる経歴を，話し去り話し来る，時には罪無き失敗談に傍人を笑倒せしむなど仲々に如才ない婆さんなりき。余は初対面の時，多く語るの時なかりしも其の後折々彼女を訪ねて教会の昔を問い，今の事情を尋ねし事一再ならざりき。

彼女は家庭に於いて二男二女の母たりしが，ポーロが加拉太人に書き贈りし意味に於いて，基督の為に生みの苦しみを為したりしは，寧ろ四人の児女の夫れよりも大なるものありたりき。彼女は三十九歳にして寡婦となりぬ。其の悔改して，日本基督教会内に於いて宣教師の長老たるゼームスバラ氏より，洗礼を領したりしは，彼女が夫に遅れし其の翌年なりき。而して一家の波瀾は，彼女を駆って横浜に走らしめ，日本に於けるバイブルウーマンの祖先たらしめしは，正に是れ政府と民間の軋轢衝突多く，自由党があらたに其の旗幟を全国に

翻して専制の迷夢を破らんとせし明治十五年なりき。彼女は天保婆の身を以て共立女学校に投じぬ。此の校は米国より来たりし女傑ピヤソン女史の主幹する処。当時未だ切支丹バテレンの熱醒めやらぬ日本に大胆にも一つの女学校を創立し、女権の強き米国風を其の儘に移し植えて、将来の女伝道師を造り、ブラオン、フルベッキ、バラ氏等が養成せし教役者と相提携して新日本を形成せんと志なれども、所謂異人さんの学校、殊に其の教ゆる処、耶蘇教の道なりと聞きて、誰しも応ずるものなき折りなりしが、神は彼女を導き彼女を駆って、ピヤソン女史の懷に投げ入れぬ。女史一見、其の鬼の如き爛たる眼を小さくして、微笑一番、之を歓迎せしならん。直ちに彼女を以て、バイブルパウーマン養成所の名簿第一頁に記入し、彼女をして前後七年間の春秋を横浜に消さしめぬ、教ゆる人も人、習う人も人。猶更に初めての伝道学校教育、随分面白い事もありしならん。彼女が小綺麗な離れの病室の柱に朝夕掲げて放さざりしは、大の髯男をも睨み殺さんとする威容あるピヤソン女史の小照なりき。

(2) 彼女の横浜に在るや海岸教会に関係しぬ。浮世の辛酸嘗め尽くし、うら若き乙女時代より人の妻となり母となり寡婦となる迄、世間には深き経験を積みてありし彼女は其の経験に加味して甲斐甲斐しくたち働きて教会員を動かし、当時の牧師に少なからぬ助力を為しぬ。明治二十年の頃なりき、彼女はピヤソン女史の意を受けて清水みね子と各派の教会を遊説し、日本連合婦人祈祷会を起こしけるとぞ。其の会に加わりしはメソジスト浸礼福音日本基督の四派を包み大仕掛けの祈祷会なるを見れば、天保生れ彼女が当時の婦人事業として実に大なるものところぞ云うべけれ。

露をだに嫌う大和の女郎花 ふるあめりかに袖はぬらさじ と、維新の初め横浜にて一女子の刃に伏せし頃よりして、市中の人猶旧弊の夢醒めやらぬ伝道も困難なりける故か、又己れ聖霊に導かると信せしにや、彼女は何時も市中より田舎に伝道し、献金など多く集めて教会に贈りしとぞ。翌廿一年彼女は上田に帰り来たりぬ。上田教会は彼女が横浜に於ける働き振りとその品行の一変を

久しく噂さし、彼女もピヤソン女史と折節帰りし事なれば双手を開いて歓迎しぬ。モアブより帰れるナヲミの昔ならねばバルツを伴うという事もなく、自ら貧しき人の落つる涙に同情を寄せ福音の種を町内に播き、或る時は生れ故郷の坂城に伝道し、城下村に行き昼夜只神の道を宣ふる事の中に心を熱くしぬ。

其の効果空しからず、信濃連合婦人会は生れ、上田婦人祈祷会に起り、婦人仕事会も創められ、状袋を張りて売溜金を積みしこと百円ばかりなりけん。彼女の家は当町の牧師真木重遠氏に其の一室を与えられ、後任伝道師小林格氏亦数年彼女の家を送りぬ。近頃岐阜訓育院を卒業せし城下村中沢信吾氏は彼女の生みし基督の子なりとかや。彼女は横浜に在りし時の如く縦横無尽に活動せり。

当時此の地に裁判所長関屋生三氏あり、其の夫人も彼女と共に教会に活動し、教会の婦人に刺激を与えると同時に男子も亦大いに進歩発展を望むの折なりし故、上田教会はミッションの手を放れて独立するに至る機運此の際に起こり来たりぬ。余は独立の功を彼女に負わしむるにあらねども、其の自給独立に向かわしめしに與つて力ありしを疑わん。小林氏去り佐久より大谷虞氏来たりしは此の頃なりき。教会の進歩歴史の回転、婦人として男子に建策し交渉せしは多くは彼女なりき。

彼女は其のピヤソン師に仕込まれし性格を遺憾なく発揮しぬ。これが為男子と衝突して悔いず他を泣かしめて顧みざりき。余は筆を収むるに当りて、彼女が学校時代から病に罹り静養するに至りし三十六年二月迄活動せし其の範囲を述べんに、仙台、白川、白坂、水戸、北越長岡、上州倉賀野、松代、坂城、佐久に及び、関西は京都伏見に達す。女だてらに恥づかしけれど、福音を伝えんば禍なるかなと思ひ詰めし彼女の信仰、彼女の愛、彼女の男勝りの気立ては驚くべきにあらずや。

明治三十七年十二月二十一日、彼女は六十九歳にして天父に召されて逝き、飛雪粉粉として千曲の水氷る夕、彼女が遺体は三百余の人に送られて横町宗畔

寺内に安置されぬ。(一部読みやすいように現代風に書き改めてある。)

この資料は、前述した弘子の受洗をバラからとしている誤り以外、生前の弘子をよく知る牧師が書いたもっとも信頼できるものである。弘子の気丈な性格、経歴、弘子を取り巻く人々との関係、ピアソン女史との出会い、伝道活動など、弘子研究の貴重な資料である。

このように弘子の伝道活動の基礎となったのが、弘子が40代で横浜山手の偕成伝道女学校（共立女子神学校）でのピアソン師との7年間の生活であった。ここでの寮生活、横浜海岸教会、それに上田教会が弘子の活動の拠点であった。

1－3 小島弘子と共立女子神学校（横浜共立学園）

[宣教師達の来日]

開港直後の横浜は、外国商館の人々や外国商船の船員たちが遊樂の巷に出入りするので、風儀が乱れ、ヘボンやブラウンが「泥沼のような社会」と嘆いていたような状況であった。

共立女子神学校は横浜の山手212番地にある。横浜海岸教会からほど遠くない場所である。横浜の港を見渡せるこの山手と呼ばれる高台一帯は、“聖なる丘”と呼ぶのに相応しいような特別な区域であった。そこから根岸にかけての一帯には明治初年に多くの外国人宣教師が居住し、ヘボン塾やブラウン塾などの英語塾（学校）、教会や女学校などが設立された。また貿易などに携わる外国人たちも居住していた地域（居留地）であった。また山手外人墓地もつくられている。

ここで後の日本キリスト教布教の中心となった人物たちの来日の年を挙げておきたい。安政6（1859）年に横浜をはじめとする5港が開港されると、アメリカ監督教会（The Protestant Episcopal Church in the U. S. A.）のロギンズ（長崎）、同じく同教会のC. M. ウィリアムズが来日した。二人とも中国で布教

活動をしていた人物である。同じ1859年には米国長老教会 (Presbyterian Church in the U. S. A.) の J. C. ヘボン、米国オランダ系改革派教会 (Reformed Church in America) の S. R. ブラウンと D. B. シモンズが神奈川に、G. F. フルベッキが長崎に来日した。ヘボンとブラウンも中国での布教経験のある人物であった。このように日本国内でのキリスト教布教の解禁を睨んで、この頃各教派では着々と準備を始めていたのである。バラ夫妻は1861年に神奈川に渡来している。このように安政6 (1859) 年から切支丹禁制高札撤去の明治6 (1873) 年までに来日した宣教師は60名にも上るという。そしてその多くは米国改革派教会、米国長老教会、会衆派のアメリカン・ボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions) などの米国系の宣教師であったことがこの時代の特徴であった。日本における宣教活動は、最初は各教派ともバラバラであったが、その後教派の違いに拘らない無教派で宣教する「日本基督教一致教会」を結成した。この「一致教会」による宣教活動が日本でプロテスタント布教の成功の一因であったと言える。

バラは慶応元 (1865) 年にキリスト教禁制下で日本人に対する初の授洗を矢野隆山に行なっている。横浜公会の成立をいつの時点とするか諸説がある。しかし日本人のための礼拝をバラが自宅で行なった日と捉えれば、1866年になる。そして横浜公会の成立の場所となった小会堂の地は徳川幕府がブラウンとバラに1864年に下附した横浜居留地167番の土地であった。ここに小会堂が建てられたのが、明治4 (1871) 年であった。明治5年にわが国最初の日本人によるプロテスタント教会である「日本基督公会」(横浜公会) が誕生した。そしてここがキリスト教の日本での布教の一大拠点となったのである。後に出てくる押川方義はバラやブラウンに師事している。また多くの青年がバラやブラウンから英語を学んでいる。英語塾 (学校) がキリスト教の布教が公認されるまでの、宣教師たちの準備期間であった。そしてその生徒の中からキリスト教徒になったものも少なくない。横浜バンドと呼ばれる新しい日本社会の改革者

たちもこの地から巣立っている。

バラの人柄について、秋山繁雄の『明治人物拾遺物語——キリスト教の一系譜』では次のように述べている。「バラは学問、思想の人ではなく、行動によって宣教を実践するひとであった。理論により、説教によって人を説得するよりも、熱誠あふれる祈祷によって心底から動揺させる人であった。海岸教会を日本人の牧師に譲ってからは専ら直接伝道に従事し、神奈川県下は勿論のこと静岡、長野、東北の各地方に巡回して宣教活動が続けた。」

小島弘子は上田においても、また横浜においてもバラに会っている。そして大きな影響を受けたと思われる。バラは滞日59年、終始一貫して直接伝道にあたった。大正8年に帰国し、翌9（1920）年89才で逝去した。バラ夫人は日本で永眠し、山手外人墓地のピアソン女史の墓の傍らに葬られている。文字通り日本伝道に生涯を捧げた最も著名な宣教師夫妻であった。優れた宣教師はバラ一人だけでない。先述した新潟伝道の中心人物であったパーム医療伝道師も来日直後に妻と赤子を亡くしているが、その使命を全うしている。召命感を持ってこの時代に来日した多くの宣教師達はその家族も含めて、彼らに出会った多くの日本人たち、日本社会に大きな影響を与えた。そしてキリスト教思想・文化を日本社会に齎したのである。かれらの功績は評価してもし過ぎることはない。

[小島弘子と共立女子神学校]

小島弘子は明治15年に横浜山手212番地にあった偕成伝道女学校（共立女子神学校）に入学し、ピアソン女史の指導を7年間受けて、初期の婦人伝道師（バイブル・ウーマン）となっている。この当時、日本に宣教師を派遣したアメリカでは、外国人宣教師による直接伝道の他に、日本人伝道師の養成、女子教育を考えていた。そこでこの目的のために日本各地に多数の所謂ミッション・スクールが設立されている。その数は明治20年ごろまでにプロテスタント系で30

数校に上る。その中にA 6 番女学校を前身とする女子学院、フェリス女学院、横浜共立学園、宮城学院などが含まれている。現在ではミッション・スクールと分類される学校の総数は200校を超えるという。ミッション・スクールは女学校が多かったが、中には男子校もあった。女学校には旧士族や新興の役人、新興の商工業者（貿易商、生糸商）の娘などが、古いあるいはまだどうなるかわからない日本の教育を取えて避け、未知のアメリカ式教育に賭けて入学したのだろう。英語の習得ばかりではなかったと思われる。親と本人、それに学校関係者の熱い思いがミッション・スクール成功の鍵であった。一方男子の方は、立身出世を夢見て上京し、ミッション・スクールで英語などを学び、活躍した人も少なくない。また作家の中にもキリスト教徒になった者も多い。

これら多くのミッション・スクールの中で、代表的な女学校であり、また小島家の3代5人の女性がそれぞれ通った3つの女学校である、横浜共立学園（弘子、次女を）、仙台宮城学院（長男嫁包子）、東京の女子学院（長女さだの娘忍と長男大治郎の娘光）について取り上げて見たい。そして比較の意味で同じ横浜山手にあるフェリス女学院についても簡単に触れたい。そしてこれらの女学校がどのような経緯で設立され、どのような家庭階層からの子女を受け入れ、またそこではどのような教育が行なわれたのかについて分析したい。この分析により、ミッション・スクールがキリスト教の布教にどのような役割を果たしたのか、また日本の学校教育にどのような役割をはたしたのか分かる。しかしミッション・スクールの詳細な史的分析は本論の主目的ではないので、ここでは本論を補足するために略述するに止めたい。個々の女学校の校史を読むと、その創立以来の百年史は正にそれぞれが一つの感動のドラマであった。

[横浜共立学園の創立]

横浜共立学園は明治4年に米国婦人一致外国（異邦）伝道協会（The Woman's Union Missionary Society of America for Heathen Lands — W. U.



(ピアソン女史)

N. S.) より3人の女性宣教師が来日し、キリスト教伝道と共に女子教育、混血児養育に力を尽くしたことに始まる。その3人とは、ミセス・メアリー・P・プライン (Pruyn)、ミス・ジュリア・N・クロスビー (Crosby)、ミセス・ルイーザ・H・ピアソン (Pierson) の3人であった。この3人の日本派遣の母体であった W. U. N. S. は、ミセス・ドリーマス (S. P. Doremus) によって設立された協会であった。この協会は、異教国伝道のために、企画、事業運営、経営など、全て女性の手で無報酬で奉仕するプロテスタントの諸教派が教

派にとらわれず合同してできた協会であった。

当時のアメリカはまだ婦人の地位は低かった。その中で、「女よ、汝の信仰は大いなるかな、願いの如く汝になれ。」(マタイ15章28節)の聖句をモットーに、困難な資金集めなどの奉仕活動を行っていた。そこにジェームス・バラから、日本の悲惨な混血児救済と女子教育のために、女性宣教師の日本派遣を強く要請してきた。これが3人の日本派遣の背景であった。

ミセス・プライン (当時51才)、ミス・クロスビー (37才)、ミセス・ピアソン (39才) が W. U. N. S. より日本に派遣された理由は、家庭に束縛されない未亡人、独身女性であったからである。共に日本に派遣される以前から海外伝道に強い意欲を持っていた人たちであった。しかしバラの女性宣教師を派遣したいという熱い願いにも拘わらず、実際日本に行く決心をすることは大変だった。それぞれの人々の決意は次の通りであった。

プラインは、「なぜお前がいかないのかという御声を聴きました。私が行き

ます。」また次のようにもその決意を述べている。「キリストのために私は自分を捧げます。私は日本の混血児収容施設の基礎を作るためにいきます。また野蛮な国で見下げられている異教国の女性たちのためにいきます。クリスチャンの女性には、福音を宣教する義務があるのです。」これは当時米国の女性たちが日本と日本女性をどう見ていたかがよく分かる言葉だ。ここに女性伝道師の育成と女子教育のための女学校の設立の背景があった。プラインは学園の総理として学園の中心として活躍した。彼女は病のため55才で帰国した⁽²²⁾。

クロスビーは「神が共に在りまして行く道の障害を取り除いてくださることを確信します。」と述べ、全身全霊を注いで主が命じられた仕事につくため来日した。そしてピアソンは7日間断食し神に祈って、日本人を心から愛することができると確信し、「私が死なねばならないなら死にます。」との思いで日本に来た。ピアソンは来日前の28才の時、夫を失い、さらに4人の子供も次々に失い、母一人を残して日本に旅立った。そして彼女は来日後28年間一度も米国に帰国することなく、明治32（1899）年に日本の土となった。彼女の墓は山手外人墓地の最も良い場所にあり、横浜共立学園関係者によって、手厚く祭られている。クロスビーも学園の会計・庶務と担当し教鞭もとった。明治8（1875）年に帰国したプラインの後を継いで2代目総理となった。そして47年間在日の後1918年に永眠し、同じ山手外人墓地のピアソンの墓の傍らに葬られている。正に召命を感じて応募した人々であった⁽²²⁾。

19世紀後半のアメリカはプロテスタンティズムによって出来上がった国であり、人々の中に真実に神が存在した。人類は進歩すべきであり、進歩は幸福を齎すものと信じていた。またアメリカ人の善意が存在した時代でもあった。ミセス・プライン、ミス・クロスビー、ミセス・ピアソンの3人は、明治4（1871）年5月にアメリカを発ち、6月に横浜に到着した。暫くは山手48番館のバラ邸に滞在した。その後8月に同所に、「アメリカン・ミッション・ホーム」(The American Mission Home)を開設した。これは日本の女子および混血児に、

キリスト教主義教育を施すことを目的とした塾舎で、現在の横浜共立学園の前身である。しかし設立当初は混血児も日本人生徒も集まらなかった。その後生徒も増え、ここでは手狭になり、明治5年に山手212番地の3672坪の広い土地を借り受けることが出来た。そして校名を「日本婦女英学校」(The English School for Japanese Young Ladies)と改称した。キリスト教禁制下で宗教色を目立たせない配慮であった。ここが現在の横浜共立学園の校地である。裏手の211番地にはブラウンの邸宅があった。明治8年に校名を「共立女学校」と改称した。

現横浜共立学園は、その後関東大震災による校舎倒壊など大きな危機に見舞われたが、この地を離れることなく、今日までその創業者の3人の精神を受け継いできた。同校はブランド化した多くのいわゆるミッション・スクールとは異なり、短大、大学を載せることも無く、また小学校や幼稚園を併設することなく、中高一貫教育という姿勢を崩していない。プライン(総理)、クロスビー(会計・庶務)、ピアソン(校長)の3人の絶妙な組み合わせが同学園発展の鍵であった。

このことはその後、共立女学校にアメリカから派遣されてきた女性宣教師や教師についても言える。1901年から35年間校長として学園の発展に貢献したルーミス(1936年帰国)、同じく1903年来日し3代目総理・教師として36年間ルーミスを支えたトレイシーは1939年に定年退職し帰国した。彼女たちも召命を感じて来日し、第二世代として共立女学校の発展に貢献した。ルーミス校長の時代(1903年ころ)の生徒数は91名、4教室の規模であった。同じことが、またこの時期に他の女学校を創立した米国女性宣教師や教師についても言える。皆優れた宣教師であり教育者であった。

同校は創立約20年後に混血児の救済という部分を廃止し、少数いた男子児童の受入も止め、女子教育一本に専念してきた、その中で女性伝道師の育成の神学校の部分と一般女子の教育に当る女学校の二本立ての体制を採った。女性伝

道師の育成の部分には明治14年設立の「偕成伝道女学校」（1907年に共立女子神学校と改称）が担当し、ピアソン女史が校長であった。小島弘子はここに明治15年に入学している。先述したように、ピアソンと弘子は家族の不幸という境遇が似ている。弘子の次女の“なを”は共立女学校の方に入学している。“なを”が何時頃入学したのかについては、同校の全面のご協力を頂いたが、関東大震災の時に校舎が倒壊・焼失してしまい、その当時の資料が無く、在籍記録の確認ができなかった。

1-4 偕成伝道女学校と小島弘子——ピアソン女史との出会い

ピアソンは独自に明治11年頃、バイブル・リーダー（女性伝道者）の養成を始めている。そして「偕成伝道女学校」が創設されたのが、明治14（1881）年であった。この学校は聖書研究とキリスト教伝道の実践を学ぶ学校であった。入学の年齢制限がなく、また学費や生活費が無くても給費生として勉強できた。そこで信仰心の篤い女性が志願した。生徒のための日本家屋の寄宿舎が、米国の女性支援者の寄付金で、明治16年、20年に建設された。小島弘子がピアソンの許に行ったのは正にこの時期であった。そのきっかけは先述したように、貿易商の見習いに横浜太田街の叔父の所に行っていた次男がコレラで早世したことだったかも知れない。次男は学園に程遠くない相沢墓地に葬られている。この頃になると長男の家業の方も回復し、弘子としては家庭の束縛もなくなり、上田を離れて横浜に出てくる余裕も出来たのだろう。

ピアソンの努力で明治29年には、伝道女学校生徒は90名、翌30年には124名になり、共立女学校生徒数より多くなったという。当時は、進級や卒業の制度もなく、生徒は学びながら伝道したという。養成された婦人伝道者は、各地の教会や伝道所に派遣された。しかし婦人伝道者で自給伝道（働いて生活をたてながら伝道する）できるのはほんの2、3名に過ぎず、多くの人々はミッション・ボードからの送金で生活していた。その額は月5ドルであったという。生徒た

ちはこれを学費や寄宿舎費に当てて、何とか生活できたのである。当時の写真を見ると年配者が多いのが目に付く。やはり若い女性だけでなく、人生経験の豊富な年配者が、その経験を生かすために入学してきたのだろう。

彼女たちの仕事は、教会や伝道所の牧師や伝道師の手伝い、病院や工場に行って聖書の読み聞かせ、未入信者の家を訪問（家庭伝道）、日曜学校の手伝いなど様々であった。在学中は聖書研究、伝道師としての座学研修を受け、またピアソンについて実地伝道の指導を受けるなど、研鑽を積み、二人一組で伝道出来るように成長していった。こうして福音を隣人に伝えられるようになった人を、バイブル・リーダーまたはバイブル・ウーマンともいった。ピアソンは毎日4時過ぎに、生徒1～2名を連れて町に出て家庭伝道をしたという。日曜日には生徒たちを引き連れて学校から地藏坂を下り、海岸教会まで礼拝に行くのが常だったという。

ピアソンは伝道に命を懸けた人であった。彼女の晩年、歩行困難になっても、椅子に体を括り付けて貰ってまでして、伝道に出かけたという逸話が伝えられている。彼女たちの下で、伝道所は研修用に横浜各地に17か所、川和、大宮、古河、富士などに創られ、また教会（講義所）は箱根、粕壁、静岡、岩本などにつくられた。ピアソンはこの他、春夏の休暇中、群馬、長野、福島、宮城、和歌山、大阪、宇和島などに精力的に伝道旅行に出かけている。その際、必ずベビー・オルガンを携行した。オルガンと讃美歌、パンフレットは伝道の有効な手段であった。また西洋音楽とピアノは学内で多くの女学生の憧れのまどだった。伝道学校の生徒たちもこの伝道に連れて行かれることが多かった。

小島弘子の場合、明治15年から21年ごろまでピアソン女史の許にいた。この間の学費、生活費をどうしていたのか不明である。明治21年に孫の光の世話をするために上田に帰り、伝道活動を精力的に始めている。その伝道範囲は、『利剣』の記事にあったように本州の広い地域であった。またこの時期に、次章に明らかにされるように聖書研究のため多くの聖書の注解書を購入している。ま

た長男の嫁包子も同様にキリスト教関係の書籍を購入している。弘子には家を離れられる時間的余裕と経済的余裕ができたと考えられる。伝道はある意味で奉仕活動であった。

ピアソンは何度か上田を訪れている。彼女は信越線開通以前に、初めて駕籠と馬車で碓氷峠を越え、信州を訪れた時の印象を次のように書いている。
(「1898年上田伝道」)⁽²³⁾

“Finally, arriving at our destination we were thankful for a quiet place in which to rest and collect our thoughts, for we have been considerably shaken by the journey. We found a small church edifice at Ueda; but the members few and work slow and difficult. We held meeting in the church, or at the residence of Christians, which were well attended and prolific of some results. About five miles from that place there lived a solitary Christian; he sent a messenger to us with an earnest request to visit his home, where he intended to gather his family, relatives, friends and neighbors; that they might have this opportunity of hearing the Gospel message. We accepted the invitation gladly, and many for the first time heard the story of redemption for fallen man. We remained about ten days, becoming much interested in the people and identified with their spiritual welfare. We have since frequently visited that area.”

ピアソンの文章には人名が記載されていないことが多いが、この時（1898年より12年前）10日間上田に滞在している。小さな城下町なので、小島弘子が同行し、弘子の家にも立ち寄ったことは充分考えられる。この文章によれば、ピアソンはその後何回も上田地方に伝道に来ている。これにはその後の信越線の開通も役立っている。

ピアソンは明治24年4月14日に、岩村田町北佐久教会（明治23年設立）で開催された「第三回信濃基督教徒婦人祈祷会」に、『利剣』の記事にもその名がみえる清水みね子、片岡はるのを伴って来ている。上田からは小島弘子が出席している。この時、ピアソンと小島弘子は一週間ほど岩村田に滞在し伝道している。岩村田町はまだ布教の遅れた地域で、バラも5月に立ち寄っている。ピアソンは明治32（1887）年に没した。弘子は明治33年4月に「東信基督者婦人会総会」に出席し、出席者に感銘を与えている²⁴。

ピアソン並びに女性伝道師としての弘子の活動の軌跡、伝道内容は、本論文では資料的・時間的制約で十分なされていない。今後の研究に待ちたい。

横浜共立学園では、ピアソン女史が亡くなってからは、明治32（1899）年からスーザン・ブラッドが第二代神学校長に就任し、1907年に共立神学校と改称している。ブラッドは1937年まで校長として在任し、伝道教育の指導・実践に当たった。この共立神学校は昭和18年に日本女子神学校に合同し、消滅した。

共立女学校の財政的基盤は創立以来長らく、アメリカのミッションによって支えられてきた。独自の教育を行なっていくためにはミッションからの独立が必要であった。その方針が確立したのが、昭和12年になってからである。それまで学園運営の経費の3分の2はボードからの支援であった。そこで学生数を増加させて、経済的自立を実現した。

また共立女学校の卒業生の進路も大変だった。折角英語や高いレベルの学問をしても、当時それを生かす職場がなかった。教師、牧師の妻になることが、それを生かす一つの道であった。その点共立女学校の卒業生の中には、先に取り上げた小島弘子の次女“なを”が岡部太郎牧師と結婚している。また押川方義と共に新潟伝道に加わった石黒まちはその後吉田亀太郎牧師と結婚している。また上田から横浜海岸教会の牧師となった稲垣信の妹稲垣ぎんも共立で学んだ後、押川方義らが創立した仙台の宮城女学校の教員となっている。

さらに稲垣ぎんの妹豊子もフェリス女学校から転じて、同時期に宮城女学校

の教員となっている。

また上田の最初の受洗者鈴木親長の娘カネも共立で学んでいる。共立女学校の卒業生の中にはもっと多くの同様な事例がある。これは共立女学校の特記すべき特徴であったと言えよう。おそらく当時のキリスト教関係者の間では、娘を学ばせるなら横浜の共立という評価があったのだろう。

1-5 ミッション・スクールの創設

女性伝道師育成、女子教育のために、ミッション・スクールを創設することは、各ミッションにとって不可欠の伝道手段であった。そのため日本各地にミッション・スクールが創設された。その中でも、横浜のフェリス・セminary、東京の女子学院は最も歴史の古い学校であった。上述した横浜共立女学校はそれに次いで古い学校である。それに小島家の嫁になった武田包子（旧姓関屋）の通った仙台の宮城女学校は少し遅れて開校している。これらの女学校の創始者たちに小島弘子は直接あっている。また弘子の娘、嫁、孫が、この中のそれぞれ別の女学校に通ったので、ミッション・スクールの例としてこの4校を取り上げたい。

明治政府も教育を重視し、明治5（1872）年の「学制」で、「尋常小学ヲ分テ上下二等トス此二等は男女共必ズ卒業スヘキモノトス」とした。しかし実際は、小学校の就学率は明治6年で男子39.9%、女子15.1%であったという。明治20年までに設立された女学校は、フェリス女学院、女子学院（以上1870年設立）、横浜共立学園（1871）、神戸女学院、平安女学院（以上1875）、立教女学院（1877）、梅花学園（1878）、活水学院、プール学院（以上1879）、成美学園、聖和女子大学（以上1880）、遺愛女子高等学校（1882）、大阪女学院、東洋英和学院、頌栄女子学院（以上1884）、北陸学院、福岡女学院（以上1885）、弘前学院、広島女学院、宮城学院、松山東雲学園、捜真女学校（以上1886）であった。このように日本全国に所謂ミッション・スクールが創設され、女子教育を担

なったのである⁽²⁵⁾。

[フェリス女学院]

横浜山手には共立女学校と並んで、キダーさんの学校と呼ばれていたフェリス・セミナリー（明治8年創立）がある。キダーはアメリカのブラウンの経営する学校の教師であったが、ブラウンと共に明治2年に来日した。そして明治3年にヘボン塾で英語を教えていたので、同校の創立はこの年としている。山手178番地のフェリス・セミナリーは横浜の華族学校とも言われ、赤い色に塗られた校舎に屋上に水汲み用のオランダ風の赤い風車が見えた。正に横浜の女学生の憧れのミッション・スクールであった。当時日本最高の洋式設備の整った学校であった。横浜の上流・中流の夫人や娘たちが生徒となった。キダーは後に明治6年ミラー牧師と結婚し、二人でフェリスの学校経営に専心した。仙台の宮城女学校などは創立時に、フェリスの建築様式、並びにカリキュラム、教科書などを参考にしている。

上田出身者も本校に関係している。稲垣信は教師として、またその妹豊子も明治17年高等科を卒業しフェリスで教え、後に宮城女学校教師となっている。稲垣信の夫人久子はヘボン博士の日本語教師奥野昌綱の次女であり、本校で学んでいる。フェリス女学院は英語教育などにも力を入れ、後に短大、4年制大学も設置し、横浜を代表する有名校の一つとなっている⁽²⁶⁾。

[女子学院]

女子学院はフェリスと並んで日本で最も古い女学校であった。しかしその設立の背景となったアメリカのミッションも前記2校と異なり、またその教育方針、その後の発展の姿も異なっている。

築地における女子教育の歴史は複雑であった。築地には英語塾もあり、宣教師と留学生が多い街（ミッション町）だったという。女子学院の前身となる諸

校について触れておきたい。まず明治3年にプレスビテリアン・ミッション（米国長老派教会）の支援で、カルゾロス夫人による「A6番女学校」（明治9年にカルゾロス夫人が広島に移ったため廃校）、が築地居留地に設立された。その後明治7年に同じプレスビテリアン・ミッションによって、ミス・パーク（タムソン）夫人の「B6番女学校」が設立された。これは明治9年に改名し、ツルー夫人の「新栄女学校」となり、場所も築地新栄町になった。同じ明治9年に原胤昭によって「原女学校」が銀座三十間堀に創られた。これは明治13年に廃校になっている。同じ年に桜井ちかによって、「桜井女学校」が麹町中六番町に創立されている。その後、桜井は北海道開拓に意欲を注いだ。そして最終的には明治23年9月に、この「桜井女学校」と「新栄女学校」が合併し、「女子学院」となった。

これ以外にも東京には多くの女子教育施設が明治15年ごろまでにつくられているが、廃校になったものも少なくない。女子学院はミッションからの援助が他校と比較すると少なかったので、独自路線を目指した。その後、矢嶋楯子、三谷民子などの優れた院長の下で、独自の校風を確立し、今日に至っている。弘子の孫忍（しのぶ）と光（みつ）は、弘子と矢島楯子との縁で、明治30年代にこの学校で学んでいる。米国長老教会宣教師インブリーが明治38年頃、母国で講演をした中で女子学院を例として取り上げ、当時の生徒の父兄は、銀行家、医師、法律家、牧師、教師、役人、商人、富裕な農家、陸海軍の将官が大部分であったと述べている。この時期になると、ミッション・スクールにその子女を入れた階層が旧士族層から、新しい社会の指導階層、中産階層へと変化して来た事が分かる。同校では決して良妻賢母型の教育を目指した訳ではなく、自立し社会に役立つ女性の育成を目指していた。またその頃になると日本人の手になる教科書が使用されていた⁽²⁷⁾。

〔宮城学院の創立〕

仙台にある現宮城学院は明治19（1886）年に、「宮城女学校」として押川方義を校主、エリザベス・R・プルーボ校長で創立された。この宮城女学校も女性伝道師育成と女子教育に熱心な学校であった。仙台東2番町51番地の民家を借り、10名の生徒で授業を開始している。この学校の創立には、その前身に明治14年に苦難の末設立された仙台教会がある。この教会は押川方義、吉田亀太郎らの東北伝道の地道な成果と新潟のパーム医療伝道師の変らぬ資金援助の結果である。この教会を母体にして、宮城女学校（宮城学院）、仙台神学校（東北学院）が誕生している²⁸⁾。

「宮城女学校」の設立には、押川の他にウィリアム・E・ホーイがいる。ホーイは合衆国改革派（The Reformed Church in the U. S. [German]）から明治18（1885）年に日本に派遣された人物であった。「合衆国改革派教会」は他教派に遅れて単独で外国伝道を行なおうと考えた。その多くの伝道候補地の中で日本が選ばれた。しかし「合衆国改革派教会」は資金準備が出来ていたにも拘らず、直ちに宣教師を派遣できなかったのは、適当な候補者の応募がなかったからであった。その条件は、妻帯者であること、牧会の経験のあること、それに優れた牧師であることなどであった。最初に派遣された宣教師は明治12年のグリングで、さらに明治16年にモールも伝道活動を強化するために派遣された。二人は横浜を避け、東京を拠点とした。二人の伝道活動の結果、明治17年に元大工町教会（後の神田教会）と明治18年に番町教会が設立された。

彼らはこの活動の中で、直接伝道の他に他の教派が既にやっているように、日本人婦人伝道師の養成、女学校の設立が有効な手段と考えた。それは家塾風の小規模な通学学校（day school）ではなくて、他教派が既に創設し且つ大きな成果を挙げているような女学校、すなわち数名の優れたクリスチャン婦人教師と数十名の少女達が一つの校舎で二十四時間起居生活を共にしながら勉学を続ける全寮制学校（boarding school）であること、そのために二人の優れた婦

人教師の派遣が必要であると考えた。かれらの具体的モデルは横浜のフェリス・セミナリーと築地にあった長老派系の全寮制の女学校（後の女子学院）となったA6番女学校であった。

そして明治18（1885）年にホーイとプルーボ、オールトの3人の日本への派遣が、「合衆国改革派教会」によって決定された。ホーイは同年12月に横浜に到着している。

当初、「合衆国改革派教会」では女学校の設置を築地と考えていた。しかしグリングはバラや押川方義らと話しあった結果、横浜や築地ではなく、仙台が男子神学校と女学校を最も切望している場所であるとの結論に達した。そこで仙台に学校を創設することにした。

最終的に築地でなく、仙台に女学校を創設することに決定したのは、横浜や取り分け東京には、すでに彼女達が作ろうとした小さな女学校が入り込む余地が無かったからでもあった。当時、東京―仙台間に鉄道が開通していなかったのも、彼女たちは横浜から海路宮城県の荻の浜港に向かい、そこからさらに小汽船で塩釜に到着した。そして押川と共に人力車で仙台に到着した。一行には稲垣信の妹ぎん（横浜共立卒）が通訳兼助手として同行し、宮城女学校最初の日本人教師となった。稲垣ぎんは上田教会の設立の処で述べたように、押川方義が明治8（1875）年に横浜から新潟のパームの所に向かった際、上田で押川のキリスト教講話を聞き、翌年兄と共に受洗している。姉の豊子（トヨ）も受洗し、フェリス英和女学校、宮城女学校で教えている。このように宮城女学校の設立には押川に縁のあった人々が関係している。

宮城女学校は押川方義を校主とし、プルーボ、オールト、ホーイ、それに地元の有力者（衆議院議員などを歴任）首藤陸三などの協力で明治19（1886）年9月18日に創立された。最初の校舎は、東二番町五十一番地の民家を借り上げた。最初の生徒は10名、すぐに16名、24名と増加している。当時の写真を見ると、日本家屋で、畳に障子、暖房は火鉢、和机で正に寺子屋状態であった。

入学希望者も多く、このままでは学校運営も困難になり、また何よりもフェリス・セミナリーのような魅力的な洋風校舎の建設の必要性があった。しかしミッションの方では財政的余裕がなかった。しかしアメリカの信者たちの献金により、新しい校地を取得し新校舎を建設できた。また45人分の机と椅子、オルガンなどもアメリカから送られてきた。

明治22（1889）年に念願の新校舎が完成した。教科書はフェリスで使用していたものを参考にした。寄宿舎の舎費は月3円であった。当時38名いた生徒の80%が寄宿舎生であった。これは当時の日本の状況を考えると、地方から上級の学校に少女が進学することは稀で、隣近所には奉公や行儀見習いに出したなどと偽って、夜こっそり家を出たという話が伝わっているくらいであった。そして女学校までの2～3日の道中、父親が信頼できる男性が同行していかないと、途中の車夫や駕籠かき、宿などで、娘一人では身の危険があったからである。中には山形から2、3日かけてわらじ履きで駕籠に乗って仙台にたどり着いたという逸話が残っているくらいの状況だった。女学校に到着し寄宿舎に入って、漸く安心ができたのである。当時は親戚縁者でも学校のある都市にいない限り、自宅からの通学は考えられなかった。寄宿舎は全人教育の場であると同時に、彼女たちの安全なサンクチャリーであったのである。寄宿舎が無ければ、当時の日本のミッション・スクールは成立しなかったと思われる。

英語による授業、慣れない集団生活、異なった生活環境、方言、外国人教師による授業は、想像以上であったことだろう。しかしそれに耐えられたのは、強い向学心、年令を越えた寮生同士の一体感、外国人教師による献身的教育などがあり、日本人教師、日本人職員・雇い人たちも、自分たちの娘のように接し、一つの大家族のような暖かい雰囲気があったからであろう。

小島弘子の長男の嫁武田包子（旧姓関屋）はこの宮城女学校の第一期生であった。東京や横浜のミッション・スクールに行かず、何故新設の宮城女学校に行ったのだろうか。父親が旧前橋藩士であって、上田の裁判官でもあったの

で、仙台に親近感があったのかも知れない。しかしこの一期生の中に関屋ゆきという少女がいた。関屋ゆきの母親は熱心なクリスチャンであって、仙台にミッション・スクールが創設されることを切望していた。そしてプルーボとオールトが船で塩釜に到着した時、ゆきはもう一人の少女と共に父親と出迎えに行って、入学希望を伝えている。包子の父親とゆきの父親は一族で、ゆきの両親は当時仙台に居住していたものと思われる。ゆきを入学させる時に、包子も一緒に入学させたものと思われる。当時の状況を考えるとこのような選択であったと思われる。この二人は予科から本科と7年間ここで学んでいる。他の二人とも成績を競って、第一回の卒業生4人の中で包子が首席であったという。第1回の卒業式（明治26年6月29日）の際、4人は分担し、ピアノ、オルガンの演奏、斉唱、日本語・英語によるスピーチをし、列席者を驚かせている⁽²⁹⁾。

明治20年代になると国粹主義的考え方が台頭し、ミッション・スクールのアメリカの教科書をそのまま使用し、アメリカ的良妻賢母に育てようとする教育方針に疑問が投げかけられた。もっと日本的教科を教え、日本人であるという教育が必要であるという考えであった。ここ宮城女学校でも明治25年に同様な動き（ストライキ事件）があり、5人の生徒が退学した。3人は明治女学校に、1人は青山女学院に、残りの1人石川梅代は松村介石と結婚し退学した。この事件の渦中にいた相馬黒光（後の中村屋創業者夫人）は、その後フェリスに移り、さらに明治女学校に移っている。当時の明治女学校は文学少女の憧れの女学校であったが、その後消滅してしまった。このようにそれぞれの女学校が異なった雰囲気を持っていたと思われる⁽³⁰⁾。

その後、宮城女学校は明治35年に校舎を全焼するという悲劇に見舞われ、創立時の貴重な資料も焼失してしまった。しかし、ミッションの全面的援助で立ち直り、今日では女子短大、女子大を設置するなど、東北地方のミッション系の教育機関として、重要な役割を果たしている。

このように明治初年から日本各地にアメリカのミッションの力を借りて、い

わゆるミッション・スクールが創設されている。明治4年の廃藩置県後、禄を失った旧士族たちは、新たな生きる道を模索した。司馬遼太郎は『明治という国家』の中で次のように記述している。「1920年代のはじめ——大正時代一杯——ぐらいまでの日本の官界、学界といった学歴社会は、ほとんど士族出身者で占めていました。その理由は、士族には学問するという、家中や個々の家々の文化があったこと、廃藩置県によって、勉強をして学校へゆく以外に自分を窮状からすくいだす道がないとされたことからくるエネルギーだったのでしょう。これが大正の末期ぐらいになって、ようやく町家や農家に影響しはじめたと見てよいと思います。」

余裕のある旧士族は娘をミッション・スクールに通わせ、男子の場合は授業料のかからない海軍兵学校などの学校に進学した。そこには新しい時代に対応して行こうとする旧士族、新興企業家（生糸商、貿易商など）、官僚、素封家、キリスト教信者などの娘たちが学んでいる。時には妻たちも一緒に学んでいた。アメリカのミッション側とすれば、良きアメリカ婦人となるような教育を導入しようとした。日本に独自の教科書が無い時代だったので、いきおいアメリカで使用していた教科書をそのまま英語で教えることが多かった。所謂リベラル・アーツ的な科目であった。旧新約聖書は勿論、英語講読・作文、数学、地理、歴史、音楽、天文学、科学、図画、国語・漢文、体操、習字などがあった。地理・歴史も日本だけでなく、万国地理・万国史も教えていた。国語・漢文では十八史略や日本外史などを教えるところもあった。この他裁縫やマナーなどもあった。日本人教師たちは彼女たちに日本人であることの自覚を植え付けようと努力した。殆どの科目が英語で教えられていたので、英語力とはくに大切であった。必死になって英単語の暗記やスペリングに時間を割いた。旧士族の子女は親から漢文の指導を受けていたので、この科目については得意であったようだ。

まだ10才に成らない者や10代半ばの娘たちが、親元を離れた長期の不自由な

集団生活はさぞ大変だったことだろう。しかしそれを乗り越えていったのは、彼女たちの新しい時代・世界への夢と希望、それを支えた米国人宣教師・教師達、それに日本人スタッフたち、親達、遥かアメリカから経済的支援を継続的にしてくれたミッションの人の善意であった。このような貴重な体験をしていった人々が、明治日本の土台石となったのである。

これは明治というこの時期、極東の国日本という国家で起きた一つの宣教のドラマであった。この研究論文の対象となった小島左門太・弘子一家も三代に亘ってこの時代の奔流に飲み込まれ、キリスト教を心の支えとして、子女の教育を重視し、ひたむきに生きた一家の一つ歴史だった。小島弘子は強い人間であった。同家のその後の代も同様に、伝統家業の継続と教育こそ時代の変化に対応していける手段であると確信していた⁽³¹⁾。

次章において、小島弘子及び包子がどのようにキリスト教を理解していたか、その残された所蔵図書から分析して見たい。

第2章 小島家所蔵図書の分析—明治期における聖書研究

2-1 小島弘子・小島包子蔵書文献目録

本稿執筆のきっかけとなったのが、2008年の夏、小島家から小島弘子・包子の40数点に及ぶキリスト教関係の図書が見つかったことであることは、冒頭で述べたとおりである。これらの図書について詳細な調査を行なったのが、弘子から数えて五代目の子孫小島沙紀である。その調査報告を整理したものが以下の目録である。

I. 小島弘子蔵書文献目録

1. 聖書

『引照 舊新約全書』

2. 聖書註解

A. ラーネッドによる註解

- 1 『馬太傳註釋 完』 ラール子デ講述 速水琢巖筆記 福音社 1888 (明治21)
- 2 『路加傳註釋 完』 ラール子デ著述 伊勢時雄譯 福音社 1887 (明治20)
- 3 『約翰傳福音書集註』 米國派遣宣教師事務局 1883 (明治16)
- 4 『約翰傳福音書集註』 (上記3に同じ)
- 5 『約翰傳福音書集註 下卷』 米國派遣宣教師事務局 1884 (明治17)
- 6 『使徒行傳註釋』 ラール子デ講述 足立琢筆記 福音社 1886 (明治19)
- 7 『羅馬書註釋 全』 米國派遣宣教師事務局 1884 (明治17)
- 8 『以弗所書註釋 全』 ラール子デ著 加藤次郎譯 福音社 1887 (明治20)
- 9 『腓立比書 可羅西書註釋』 ラール子デ講述 楠瀬一貫筆記 福音社 1890

(明治23)

- 10『帖撒羅尼迦前後書註釋 全』 ラール子デ口述 速水琢嚴筆録 福音社
1888 (明治21)
- 11『提摩太前後書 提多書 腓利門書註釋 全』 ラール子デ講述 速水琢嚴筆
録 福音社 1889 (明治22)
- 12『希伯來書註釋 全』 ラール子デ講述 足立琢筆記 米國派遣宣教師事務局
1886 (明治19)
- 13『雅各 彼得前後書 約翰一二三 猶太書註釋』 ラー子ッド講述 楠瀬一貫
筆記 福音社 1891 (明治24)
- 14『黙示録註釋 全』 ラール子デ講述 足立琢筆記 福音社 1887 (明治20)

B. その他の著者による註解

- 1『聖書衍義』 表紙・奥付破損
- 2『馬太傳註解 全』 安川亭校閲 竹内廣業選輯 十字屋 1886 (明治19)
- 3『馬太傳註釋』 2と奥付同じ
- 4『哥林多前書註釋』 ヲーチス・ケレー 金森道倫同選 米國派遣宣教師事務
局 1885 (明治18)
- 5『哥林多後書註釋 全』 石田祐安君編著 二三書店 1889 (明治22)
- 6『訓點馬可講義』 花之安著 倫敦聖教書類會社 1888 (明治21)

3. その他

- 1『廟祝問答』 出版年・発行所記載なし
- 2『聖霊のはたらき 全』 クララ・サンズ女教師著 高橋五郎君校閲
東京聖教書類會社 1889 (明治22)
- 3『ルーテル傳』 村田勤著 警醒社 1897 (明治30)
- 4『修徳養信 思想の林 一名日毎のさと』 星野光多編 警醒社書店

1893 (明治26)

- 5 『希伯来詩 心の緒琴 下』 湯谷紫苑著 教文館 1896 (明治29)

II. 小島包子蔵書文献目録

1. 聖 書

- 1 『引照 舊新約全書』 大日本聖書館 1891 (明治24)
- 2 『訓點 舊新約全書』 北英國聖書會社 1883 (明治16)
- 3 『訓點新約全書』 米國聖書會社 1884 (明治17)
- 4 THE HOLY BIBLE: OLD AND NEW TESTAMANTS, AMERICAN BIBLE SOCIETY: NEW YORK 1886

2. 讃 美 歌

- 『譜附基督教聖歌集』 美以出版會社 1890 (明治23)

3. 聖 書 註 解

- 『路加傳註釋 完』 ラール子テ著述 伊勢時雄譯 福音社 1887 (明治20)

4. そ の 他

- 1 『教法改革かるびん言行録』 ジョン・ロード君著 尾島眞治君譯 十字屋 1889 (明治22)
- 2 『求安録』 (第四版) 内村鑑三著 警醒社 1900 (明治33)
- 3 『世界歴史譚 第三編 耶穌』 上田敏著 博文館 1899 (明治32)

5. 松村介石の著書

- 1 『保羅之傳 全』 (再版) 警醒社 1894 (明治27)

- 2 『阿伯拉罕 倫古龍伝』（第五版） 警醒社 1898（明治31）
- 3 『婦人のかがみ』（第三版） 警醒社 1898（明治31）
- 4 『学生の前途』（再版） 警醒社 1899（明治32）
- 5 『アブラハム 倫古龍傳』 警醒社 1905（明治38）

その他、『大正増補和譯英辞林』（1886年、大日本中外堂）を含む女学校時代の教科書と思われるもの4冊が含まれる。

2-2 小島弘子・包子所有の聖書

小島弘子と包子が所有していた邦語訳聖書は、現存する限り2冊ある。いずれも、『引照 舊新約全書』である。弘子の所有していたものについては、上記のとおり出版年等が破損している。他方、包子の所有していたものについては、1891（明治24）年に大日本聖書館から出版されたものであることが分かる。

ヘボン、ブラウンを中心とし、奥野昌綱、松山高吉、高橋五郎ら日本人助手が加わった聖書翻訳委員会（翻訳委員社中）による新約聖書の全訳が完成し『新約全書』として米国聖書会社から出版されたのが1880（明治13）年のことである。さらに旧約聖書の全訳が完成し、『舊約全書』として米国聖書会社から出版されるのが1888（明治21）年であり、この翌年、『新約全書』と『舊約全書』を合本し、「引照」を付した『引照 舊新約聖書』が大英国、北英国、米国の三聖書会社から出版される。「引照」付きの聖書とは、聖書のある本文を理解する際に、他の本文と相互に関連づけて理解することができるように、その参照すべき箇所を指示を付したものである。

包子所有の聖書はこの『引照 舊新約聖書』の1891年版である。発行が大日本聖書館となっているのは、1890（明治23）年から、上記の三聖書会社と英国聖教書類会社（ロンドン）と米国基督教書類会社が事業合同を行ない、刊行聖書の表紙に「大日本聖書館」と印刷するようになったからである。弘子が所有

していた聖書もこれと同じであったか、あるいは1889（明治22）年版であった可能性もある。さらに、弘子が受洗したのは明治9年のことであったから、当然、この『引照 舊新約聖書』が出版される以前の聖書を所有していたに違いないが、それは残っていない。これは包子についても同様である。

なお、包子の聖書には『聖書之友日課表』がはさまっている。これには『聖書之友』第七号（1908年1月1日）、聖書之友創立第貳拾五年と記され、また「會友 小島包子殿 禁賣買」とも記されている。「聖書之友」は、世界中のキリスト者が日々同じ聖句を読むことを目的とする運動として、1879（明治12）年にロンドンにおいて創立された組織で、日本においては、1883（明治16）年に設立され、『聖書之友日課表』などを発行した。1888（明治21）年からは『聖書之友月報』、92（明治25）年からは改題して『聖書之友雑誌』を発行し、これには日課表も含まれていた。「聖書之友」の命名者は、津田梅子の父親津田仙（1837-1909年）である。包子所有の日課表は、「聖書之友」創立25年を記念して、別刷りで会友に配布されたものであろう。包子は、主婦としての一日が終わった後に、こうした日課表に従って聖書を読んでいたのかもしれない。

さらに、包子の所有していた聖書には、『訓點 舊新約全書』1883（明治16）年、北英國聖書會社および『訓點新約全書』1884（明治17）年、米國聖書會社がある。前者には関屋、後者には武田包子の判子が押されていることから、包子が宮城女学校在学中に購入したものと推定される。これらは、アメリカン・ボードに所属するブリッジマン（E. C. Bridgman, 1801-61年）と米国長老教会に所属するカルバートソン（M. S. Culbertson, 1819-62年）などによって漢訳された『耶穌基督救世主新約全書』（寧波 1859年）と『旧約全書』（上海 1863年）に訓点を施したもので、ウイリアムズ（C. M. Williams, 1827-1910年）、フルベッキ（C. Verbeck, 1830-98年）そして中村正直（1832-91年）がそれを行なった。『訓點新約全書』の最初の版は1879（明治12）年に出版され、版を重ねる。また新約と旧約合わせた四冊本の『訓點 舊新約全書』が出版されるの

が1883（明治16）年である。明治初期までの知識人は漢学の素養を十分に持っており、彼らにとっては漢訳の聖書を理解することはそれほど困難なことではなかった。したがって、これらは、聖書の和訳が完成するまで、さらに完成した後も、版を重ねることになる。海老沢有道は「和訳聖書は極論すれば一般婦女子用でありプロテスタントの指導的人物は、むしろ漢訳聖書に親しみを覚えていたといえるし、一般的知識人への働きかけとしても、むしろ漢文のほうが何となく権威あるように思われていた時代であった」（『日本の聖書—聖書和訳の歴史—』講談社学術文庫、1989年、p. 306）と述べているが、小島包子はすでに述べたとおり、漢文の知識を十分に備えており、漢訳聖書を読みこなすことができたと思われる。むしろ、英訳の聖書に関しても同様である。

2-3 小島弘子所有の聖書註解

小島弘子の蔵書のなかで、何よりも注目すべきことは、その聖書註解書である。キリスト教系の大学図書館ならいざ知らず、個人の蔵書の中でこれだけの聖書註解書が揃っているのは稀有なことだろう。上述のように弘子は、明治21年、横浜から上田に戻り、明治24年以降は上田教会の執事を務めると共に、明治36年に病のため静養に入るまで、日本各地を伝道した。弘子が新約聖書の全巻に及ぶ註解書を揃えていたのは、こうした伝道活動における説教や祈禱会での奨励の準備に必要だったからであろう。

弘子の所有していた註解書のうち14冊は、ラール子デ、つまりラーネッド（Dwight Whitney Learned 1848-1943年）のものである。すなわち、『馬太傳註釋 完』（マタイによる福音書）、『路加傳註釋 完』（ルカによる福音書）、『約翰傳福音書集註』（ヨハネによる福音書）、『使徒行傳註釋』（使徒言行録）、『羅馬書註釋 全』（ローマの信徒への手紙）、『以弗所書註釋 全』（エフェソの信徒への手紙）、『腓立比書 可羅西書註譯』（フィリピの信徒への手紙、コロサイの信徒への手紙）、『帖撒羅尼迦前後書註釋 全』（テサロニケの信徒への手

紙一、二),『提摩太前後書 提多書 腓利門書註釋 全』(テモテへの手紙一、二、テトスへの手紙、フィレモンへの手紙),『希伯來書註釋 全』(ヘブライ人への手紙),『雅各 彼得前後書 約翰一二三 猶太書註釋』(ヤコブの手紙、ペトロの手紙一、二、ヨハネの手紙一、二、三、ユダの手紙),『黙示録註釋 全』(ヨハネの黙示録)である。ラーネッドは、新約聖書のすべての書物について註解を残しているが、弘子の蔵書の中には「マルコによる福音書」「コリントの信徒への手紙一」「コリントの信徒への手紙二」および「ガラテヤの信徒への手紙」の註解が含まれていない。

「マルコによる福音書」については、香港を中心に活躍したドイツ人宣教師ファーパー(E. Faber, 花之安)の『馬可講義』(1874年)に訓点を施した『訓點馬可講義』が所蔵されている。弘子も漢文を解したのであろう。また「コリントの信徒への手紙一、二」については、1878年に来日し岡山で宣教に従事した後、92年から同志社の神学校で教えたケーリ(Otis Cary, 1851-1932年)による『哥林多前書註釋』および『哥林多後書註釋 全』をすでに所有していたため、購入しなかったのかもしれない。しかし、「マタイによる福音書」については、竹内廣業選輯『馬太傳註解 全』も所有していたことは上の目録が示すとおりである。表紙・奥付が破損している『聖書衍義』は、ハッパー(哈巴)著、村上俊吉訳、米国遣伝事務局、1880(明治13)年であろう。こうしてみると、弘子は、「ガラテヤの信徒への手紙」の註解を除いて、新約聖書の中すべての書物に関する註解書を所有していたことになる。したがって、「ガラテヤの信徒への手紙」の註解についても、本来は所有していたものが失われた可能性も否定できない。旧約聖書に関する註解書が含まれていないのは、上述のように、旧約聖書そのものの翻訳が完成するのが1888(明治21)年であり、本格的な註解書が出版されるのもそれ以降のことだからである。

弘子がラーネッドの註解書を最も多く所有していたことは、上述のとおりだが、次に、このラーネッドの生涯と彼の註解書について簡単に述べておこう。

ラーネッドは、アメリカン・ボードの宣教師として1875（明治8）年に来日し、翌年4月から同志社で教え始める。その教育活動は、1928（昭和3）年に帰国するまでの52年あまりに及び、聖書神学、キリスト教教会史、教理史、新約釈義そして経済学、政治学の講義を行なった。日本における社会福祉事業の開拓者として知られる留岡幸助（1864-1934年）は、1885年（明治18）から88（明治21）年、同志社の神学科邦語神学課でラーネッドから新約聖書の講義を聞いた一人だが、そのラーネッドについて「曾て私の母校在学中先生の我国に來られたのは、右手にバイブルを持ち、左手に経済学を携え、この二つの武器を以て我が国を教化せんとの理想なりしやう承り候」（住谷悦治『ラーネッド博士伝』未来社、1973年、p. 72）と述べている。ラーネッドの教育活動を端的に示す言葉であろう。経済学・政治学に関しては、『七一雑報』に連載された「経済学略説」が『経済学新論』として1886（明治19）年に出版され、『六合雑誌』に掲載された「政治学大意」が『経済学之原理』として1891（明治24）年に出版された。

しかし、彼の業績として何よりも重要なのは聖書註解書であろう。海老沢有造は、「同志社のラーネッドの新約釈義における業績は、明治キリスト教史上に輝くものがある。『約翰傳集註』（伊勢時雄訳、1883年）、『使徒行傳註釋』（足立琢訳、1886年）などにはじまり、新約各書にわたり註解を加え、明治を通じて幾回も改訂増補しつつ、広く愛用された」（前掲書 p. 341）と述べている。実際、ラーネッドは、1883（明治16）年から1892（明治25）年までに新約聖書全巻にわたる註釈を出版し、さらに、1905（明治38）年から、1910（明治43）年までに再び新約聖書全巻にわたる講解を出版している。これらの註解書のもとになったのが同志社における講義であったことは、上述の留岡幸助の「私は先生より新約聖書を馬太伝より黙示録までブツ通して講義を聞き申し候。私に多少でも聖書の知識ありとすれば其れは先生の賜と存候」（前掲書 p. 72）という言葉からも窺うことができる。

ラーネットの聖書註解については、すでに塩野和夫「ラーネット書簡に見る新約聖書の初期注解書」(同志社大学人文科学研究叢書 XXXIII 『来日アメリカ宣教師—アメリカン・ボード宣教師書簡の研究1869~1890—』同志社大学人文科学研究所編, 現代史料出版, 1999年, pp. 203-222)において、『希伯來書註釋 全』『使徒行傳註釋』『以弗所書註釋 全』『加拉太書註釋』の四書の概要と分析がなされている(210-214頁)。そこで本稿では、新約聖書の最初に置かれている「マタイ福音書」の註解を取り上げることとする。

『新約聖書馬太傳福音書註釋』は、上記の目録にあるとおり、1888(明治21)年に大阪の福音社から出版された。全体で750頁だが、冒頭には21頁ほどの「総論」が置かれる。「総論」は「第一 総して四福音書を論ず」「第二 別して馬太傳を論ず」「第三 ユダヤ人を論ず」「第四 當時社会の現状」に分かれ、またヨーロッパとアジアの地図およびパレスチナの地図が挿入されている。これによって、読者は、四福音書と「マタイ福音書」についての基礎的な理解そして「マタイ福音書」が展開される歴史的な背景と地理に関する基礎的な知識を得ることができるようになっている。

この「総論」の「第三 ユダヤ人を論ず」の冒頭で、ラーネットがキリスト教を日本人に少しでも近づきやすくするために述べた興味深い一文があるので、引用しておこう。

「基督教は原ユダヤ人の中より起源し宗教なれば其のユダヤ人の歴史と當時の現象とを熟知せざれば基督教も恐らくは十分知り得ること能はざるべし、或る人は基督教を指して泰西の一宗教の如く見做せども決して然らず、却て東洋の一大宗教なるべし、左れば基督教は欧米各国に産まれずして却て亜細亞洲の西端ありさまに生ぜり、抑ユダヤの地境たるアジア洲の西端にに在り、日本は同じアジア洲の東端に位せり、左れば日本国とユダヤ国とは其方向は東西に異なれども同じアジア洲に住し同じ大陸に居する者なれば日本人にして而も基督教を信受することは西洋の宗教を信受するの比に非ざるなり…」(7頁:引用に際しては

旧漢字を改め、また原文では漢字の横には、すべてふりがなが付されているが、必要と思われる場合を除いて省略した)。

次に、註釈の具体的な例として、少し長いが、「マタイ福音書」の「山上の説教(垂訓)」(5-7章)の註釈から5章3節の部分引用しよう。

「心の貧^{まず}しき者は福^{さひはい}なり天国^{すなは}は即ち^{ひと}其人^{もの}の有^{なり}なれば也

○貧^{まず}しき者とは肉体上の貧^{まず}困^{しき}に非ず、心の貧^{まず}しき者は肉体の貧富貴賤に拘はらず、必らずキリストの称^ほ譽^{まれ}を受くべきことを現はす、夫れ基督教は実に信者の貧困^{なぐさ}を安^{なぐさ}慰^{なぐさ}むるものなりしが決して正当なる方法^{とみ}を以て得たる富有に反対する者に非ず、キリストの恩恵と幸福とは必ずしも貧^{まず}しき者の受くべきに限らず、又智恵の貧^{まず}しき者は即ち無学無識者の受くべきに限らず、学無学貴賤貧富の別なく凡そ信仰心のある者は必ず之を受くべきなり、無学無識は決して誉むべきに非ず、貧^{まず}賤困乏は決して尊^{たい}むべきにあらず、唯人々己の高慢驕傲の角を折^{くじ}き常に謙遜と柔和を保つべきこそ最も切^{たい}要^{せつ}なれ、他言を以て云へば人々自ら罪惡の淵に沈めると、その羸^{よわ}弱^きことに感じて無限大能を有^{しん}ち給^{しん}ふ真神^{たすけ}の恩助を希ふとの必要を知るべき也、然れば傲慢を卑^{くだ}しめ、心の謙遜を誉め給ふ例は聖書に多く見る所なり、今一二著明のものを示さん、即ち箴言二十九章二十三節に「人の傲^{ひく}りには必ず其^{へり}れをして卑^{くだ}からしめ唯心に遜^{へり}る者は必ず榮^あに獲^いん」と、以賽亜書五十七章十五節に「蓋^{けだ}し我は崇高清^{あみく}潔^{わい}の所に居^あり亦哀悔謙遜の心に居る者なり以て謙遜なる者の靈を甦^あらせ且つ哀悔する者の心^あを甦^あらす」と、全六十六章二節に「エホバ云く我が顧^めみる所^{ぐみ}の人は謙遜なる者又我言に因^るりて戦慄する者なり」と在^るる是なり、亦謙遜によりて神の恩顧^{めぐみ}を受くるの例は路加伝十八章十節已下に記せるパリサイ人と税吏^{みづごと}との事蹟^{ありさ}を以て知るべし、就中十四節に「夫すべて自己^{たかぶ}を高^{さげ}る者は卑^{へり}られ自己^{あけ}を卑^{さげ}す者は高^あらるべし」と記せり、特に高慢心はキリストの徒と為るに最も大いなる障礙物なり、夫自己^{さまたげ}の富裕^{とみ}と学識と、善行とに誇る者は恐らくはキリストに服従^{ふく}ふ心起^ここらざるべし、然れば吾人信徒の最も捨^す棄^つべき者は高慢自負の妄想より大なるはなし、神は高慢矜傲

の心を^{にく}惡み玉ふものなり、即ち箴言八章十三節に「^{たかぶり}矜驕と^{ほこり}暴慢と惡行と及び^{よこしま}邪曲なる口は我が^{よこしま}惡む所たり」と全十六章十八節に「^{ほこり}傲は^{やぶれ}敗に先立ち驕れる心は^{たふれ}傾跌に先立つ」と、全二十九章二十三節を見るべし、又雅各書四章十節には「自己を^{ひくく}主の前に卑せよ然ば主なんぢらを高くせん」と戒めたり斯く上に記する例証を以て見るときは愈々以て高慢自負の惡むべく、謙遜溫柔の稱すべきを知るに足れり、^{ただ}啻に謙遜心の稱すべきのみならず、斯心こそ實に天国の民と為るべき幸福を受くるに足るべきものなり、○天国は即ち其人の有なれば也　とは謙遜廉潔にして躬自ら^{よわき}尪弱を感じ常に神に^{よりすが}憑頼るの念ある者は必ず^{みくに}聖国に入ることを得べしとの義なり、然れば今是等の例を聖書に依りて^{もと}索めしに、雅各書二章五節に「神は斯世の貧者を選びて信仰に富せ己を愛する者に約束し給ひし所の国を嗣べき者とならしめ給ふ」と記せり、之と全く反対の意を現はせし所は^{こりんと}哥林多前書六章十節に「^{ぬすみ}盜竊、^{むさぼり}貪婪、^{さけにあひ}沈湎、^{ののしり}辱罵、^{うばふ}勒索者等は皆神の国を嗣ことを得ざる也」と記せり、然則ち謙遜斯の如き人々は必ず聖国に入り聖徒となるのみならず、聖国の幸福は彼等の^{たもつ}特有ところなり、是以て現在には神の聖国に入り中心自ら^{よろこび}喜樂と^{やすき}安寧を得、未来世には完全なる^{さかえ}栄光と^{さいはい}幸慶とを得べきなり」(301-303頁)。

この箇所を註釈するに先立って、ラーネッドは、まず「ルカ福音書」の平行箇所（6章20節以下）について言及し、「マタイ福音書」が山の上で行なわれたイエスの説教を記録しているのに対し、「ルカ福音書」が平地で行なわれた説教を記録していることを指摘する（101-102頁）。さらに、「マタイ福音書」5章3節から16節まで「聖国に入る者の性質及び其^{つとめ}職務を記す」と述べて（102-103頁）、本章の区分を示した後に、各節の註釈に入る。註釈の冒頭には、各節の聖書の本文が大きな活字で印刷され、さらに○以下に註釈される語句が提示され、註釈が述べられる。

5章3節の場合は、「貧しき者」「天国は即ち其人の有なれば也」の二つの語句に分けられる。「貧しき者」についての註釈では、キリスト教の救いが「学

無学貴賤貧富」に関わらず与えられること、しかし、キリスト教が正当な経済活動を否定するものではないことが述べられた後、ここで言う「心の貧しき者」とは「心の謙遜」な者であることが述べられる。さらに、これを詳しく説明するために旧約聖書の「箴言」「イザヤ書」、新約聖書の「ルカ福音書」「ヤコブの手紙」の語句が引用され、各々の引用に関しても簡単な註釈が記される。後半の「天国は即ち其人の有なれば也」もやはり「ヤコブの手紙」と「コリントの信徒への手紙一」からの引用がなされて、註釈がなされている。

こうしてみると、ラーネットの註釈は、聖書の本文を一節ずつ取り上げ、関連する聖書の他の箇所も引用しながら、その語句を逐一説明していくが、その際に、キリスト教に対する誤解、偏見、反発も予想し、聖書とキリスト教に関する正確な知識を伝えようとしている。そして、彼の註釈の原則となっているのが、何よりも、「聖書は聖書から説明されるべきである」(Scripturam ex Scriptura explicandam esse) という宗教改革以来の伝統的な原則であることは明白であろう。

上述の塩野和夫の論文は、ラーネットの註釈が「学問性を踏まえながらも研究書を意図したのではなく、日本の教会活動の現場への貢献を意図していた」と指摘し、その読み手として「現場の牧師や神学生」を考える（前掲論文 p. 211, 215）。小島弘子は、まさしくこの意図のとおり、彼女の伝道活動にラーネットの註釈書を活用したのである。

2-4 その他の書物について

小島弘子・包子の蔵書の中で最も注目すべきは、以上の聖書註解書であるが、その他にも興味深い書籍が含まれている。簡単に説明しておこう。

『^{びょうしゆく}廟 祝問答』は、在華宣教師ゲネール (F. Genär) が伝道用パンフレットとして1856年に香港で出版したもののだが、J. H. バラが邦訳し、1874 (明治7) 年に出版し、版を重ねた。明治最初期のプロテスタント・キリスト教の文書と

して有名である。弘子所蔵のものは、和綴じであるが、出版年については不明である。

『聖霊のはたらき 全』は、バプテスト教会の婦人宣教師として1875（明治8）年に来日したクララ・サンズ（Clara Sands, 1844-1911年）の著書である。彼女が自宅で開始した聖教学校は、後に捜真女学校となり、今日に到っている。

日本における草創期の宗教改革研究者として知られる村田勤（1866-1921）の『ルーテル傳』および日本基督会を創立し、山陰地方の伝道に力を注いだ尾島^{さねはる}真治の訳したジョン・ロードの『教法改革かるびん言行録』は、宗教改革者ルターとカルヴァンに関する、日本で最初のもとなった書物である。

『修徳養信 思想の林 一名日毎のさとり』の著者星野^{みつた}光多（1860-1932）は、1875（明治8）年、横浜海岸教会でバラから受洗し、1883（明治16）年に伝道者となる決心をし、以後、牧師として活躍する。おそらく、小島弘子は、横浜海岸教会時代に彼と面識があっただろう。

『希伯来詩 心の緒琴 下』の著者湯谷紫菀（磋一郎 1864-1941年）は賛美歌作者として知られている。『世界歴史譚 第三編 耶蘇』の著者は、翻訳詩集『海潮音』で知られる上田敏（1874-1916年）であるが、彼は子供の頃から聖書を熟読し、イエス伝である本書の評価も高い。

最後に、包子の蔵書の中には、内村鑑三や植村正久とも並び称されたこともある伝道者松村介石（1859-1939年）の著作5点および宮城女学校時代の教科書が含まれている。前者については、介石と包子の実家関屋家との間で何らかの親戚（姻籍）関係があったとも推測されるが、詳しいことは分からない。女学校時代の教科書については、教育史の観点からすると興味深い点もあるかもしれないが、ここで本稿の説明を終わることにしよう。

おわりに

再三述べたとおり、本稿の執筆のきっかけとなったのは、2008年の夏、小島

家において小島弘子・包子所蔵の図書が発見されたことにある。われわれが目にした40数冊の書物は、それらの所有者についての探求へとわれわれを促していた。そこで、われわれは、文献資料を調査・収集し、それらを読むだけでなく、彼女たちが暮らした土地、家、学んだ場所を歩いてみた。彼女たちが語りかけてくる声に耳を傾けようと思ったからである。

かつて宮下は『信濃の鋳物師』を執筆したが、それは、鋳物師としての小島家の男の歴史であったとも言える。しかし、小島弘子から出発した本稿の探求は、小島包子へと進んでいく過程で、おのずと小島家の女の歴史を語ることになった。同時にそれは、明治初期の日本におけるキリスト教の伝道と教会形成そして女子教育の歴史の一端を明らかにすることでもあった。彼女たちがキリスト教信仰を受け入れることによって、この歴史の形成に参加し、確かな足跡を残していたからである。彼女たちは「強い女」(mulier fortis 箴言31章10節)であった。

むろん、本稿で語りえたことは、ほんのわずかなことである。大正12年に東京三崎會館から出版された高橋楯雄『日本バプテスト史略 上』の末尾には、1888(明治21)年の日本のプロテスタント・キリスト教の統計が付されている。それによると、男子宣教師150名、独身男子宣教師27名、独身女子宣教師124名、合計(婦人を加えて)451名とあり、また婦人伝道学校は3、生徒数は93名とある。小島弘子がこの統計の中に含まれているのか否かは分からない。上述のように、この年、弘子は横浜の偕成伝道女学校から上田に戻り、伝道活動を開始している。本稿では、この活動については具体的に述べるができなかった。これは今後の課題である。

本稿を執筆するにあたり、多くの方々のご協力を得ることができた。清泉女学院短期大学の北原明文前教授、横浜共立学園の方々、横浜海岸教会、そして弘子の子孫小島沙紀氏の献身的な協力に心からの御礼を申し上げる。

参考・引用文献

〔第1章〕

- (1) もろさわようこ『信濃の女』(上) 未来社 1969年(新装版1989年)
- (2) a. 北原明文「明治期南佐久農村の基督教講義所」東北大学『国史談話会雑誌』22号所収 1981年
b. 同「明治期南佐久農村の基督教」東北大学『国史談話会雑誌』24号所収 1983年
c. 同「明治初期の上田藩士と基督教の受容」東北大学『国史談話会雑誌』30号所収 1989年
d. 同「明治初中期の日本基督信州上田教会の成立」東北大学『国史談話会雑誌』38号所収 1997年
- (3) 宮下史明『信濃の鋳物師』小島光発行(非売品)1964年
- (4) 国立歴史民族博物館『歴史のなかの鉄砲伝来』2006年
- (5) 柳沢健太郎編『小島大治郎翁』(非売品)1957年
- (6) 注(3)前掲書
- (7) 本家系図を作成するに当たり、「小島家過去帖」,「上田教会受洗記録」,墓碑銘,その他小島家資料などを参考にした。生年月日,死亡年月日も正確を期したつもりであるが,旧暦と新暦(明治5年12月)に跨る人物もあり,また数え年を使用している場合もあり,1年ほどのずれがある場合もあることを,始めにお断りしておきたい。
- (8) 上田教会『日本キリスト教会上田教会歴史資料集』(1)(2) 2001年
- (9) 海老沢有道『維新変革期とキリスト教』所収「第11章 信州上田基督公会の成立」新生社 1968年
- (10) 注(5)前掲書
- (11) a. 宮城学院『天にみ栄え 宮城学院の百年』1987年
b. 同『宮城学院七十年史』1956年
- (12) 小島大治郎弘纂『小島包子追悼集』(非売品)1925年
- (13) 小島謙四郎編『光の子供のごとく歩め』小島尚二発行(非売品)1981年
- (14) 井上平三郎『濱のともし火』キリスト新聞社 1983年 8章192~193頁
- (15) 北原注(2), 海老沢注(9), 井上注(14)と同じ
塩入隆「明治前期長野県北信地方における教会の形成過程」雑誌『信濃』36巻9号1984年
- (16) 注(11)前掲書 (a) 52頁
- (17) 稲垣信「風変わりな禁酒教会」『日本伝道めぐみのあと』(『近代日本キリスト教名著選集(キリスト教受容史篇) 20』日本図書センター 2003年所収)
- (18) 注(8)前掲書
- (19) 工藤英一『日本社会とプロテスタント伝道』日本基督教団出版部 1959年
同『明治期のキリスト教—日本プロテスタント史話』教文館 1979年
- (20) 注(11)前掲書 74~75頁 同『宮城学院七十年史』1956年
- (21) 竹内虎成「小島弘子小伝」(1)(2)佐久基督教会青年会紙『利剣』4号5号所収 1905年 本資料は前清泉女学院短期大学教授の北原明文先生よりご教示頂いた。
- (22) a. 横浜共立学園『横浜共立学園120年の歩み』1991年
b. 同『横浜共立学園の120年』1991年
c. 同『横浜共立学園六十年史』1933年
d. 同『横浜共立学園資料集』資料No. 2377「信州上田伝道」257頁 2004年
e. 同『横浜山手221』1980年

- f. Pierson L. H. "A Quarter of a Century in the ISLAND EMPIRE or The Progress of a Mission in Japan" Methodist Publishing House, 1899
- g. 共立女学校・共立女子神学校『開校五拾年史』1921年
- 23 注24 (f) (英文) 61頁 邦訳注24 (d) 257～258頁
- 24 注(2)記載論文 (b) 4 頁
- 25 注(11)前掲書 (a) 152頁
- 26 フェリス女学院『フェリス女学院100年史』1970年
- 27 女子学院『女子学院八十年史』1951年
女子学院『女子学院の歴史』1985年
- 28 注(11)前掲書 (a)
- 29 注(11)前掲書 (a) 257～263頁
- 30 注(11)前掲書 (a) 234～251頁
- 31 小島弘子の家系には大学教授になっている者が何人もいる。家系図の中の岡部弥太郎は元帝大・ICU 教授であった。湊晶子は前東京女子大学学長、光の子小島謙四郎は早稲田大学名誉教授である。また現職の大学教授も何人かいる。
(その他参考文献)
- 32 鈴木範久『日本キリスト教史物語』教文館 2001年
- 33 『日本キリスト教歴史大辞典』教文館 1988年
- 34 佐藤八寿子『ミッション・スクール』中公新書 No. 1864 2006年
- 35 高谷道男「宣教師と横浜バンド」 岩波書店『文学』VOL. 47所収 1979年
- 36 司馬遼太郎『明治という国家』日本放送出版教会 1989年
[第2章]
- (1) 門脇清・大柴恒『門脇文庫日本語聖書翻訳史』新教出版社 1983年
- (2) 海老澤有道『日本の聖書—聖書和訳の歴史』講談社学術文庫 1989年
- (3) 『日本キリスト教文献目録—明治期—』国際基督教大学 1965年
- (4) 『明治期キリスト教文献目録—翻訳文学その他特別資料』青山学院資料センター 1992年
- (5) 住谷悦治『ラーネッド博士伝』未来社 1973年
- (6) 同志社大学人文科学研究所編『来日アメリカ宣教師—アメリカン・ボード宣教師書簡の研究 1869～1890—』現代史料出版 1999年
- (7) 高橋楯雄『日本バプテスト史略 上』(『近代日本キリスト教名著選集 (キリスト教教派史篇) 3』日本図書センター 2003年所収)